

ポスト・パックスアメリカーナと日本の役割
——日米貿易の視点から考える——
甲南大学 経済学部 四回生 吉川 亜子（中島ゼミ）

目 次

- I はじめに
- II 世界経済構造の変化
 - 1) アメリカ経済の相対的衰退
 - 2) 国際経済の分裂、統合
- III 戦後の日本貿易
 - 1) 戦後日本経済と貿易の概要
 - 2) 貿易構造の変化
 - 3) 貿易内容の変化
 - 4) 激化する貿易摩擦
- IV むすび—構造変化のもたらしたもの—

アメリカザリガニの脱皮ホルモン
~Y-器官からの分泌と体液中の組成について~
甲南大学 理学部 四回生 辻 孝司
(生物学科 園部研究室, 共同実験者 太田 浩一)

〈序論〉

甲殻類は脱皮を繰り返すことで成長するため、その現象は個体にとって極めて重要なものである。この脱皮現象を引き起こす要因となっているものは、一般にEcdysteroidsと呼ばれるステロイド化合物である。甲殻類の場合、EcdysteroidsはY-器官(Y-organ)によって合成・分泌され、脱皮を誘導する。また、Ecdysteroidsの分泌はX-器官(X-organ)サイナス腺系から放出される脱皮抑制ホルモン(MIH)によって抑制される。

ところで、Y-organから分泌されるEcdysteroidsはザリガニの一種：*Orconectes limosus*やイチョウガニの一種：*Cancer antennarius*ではEcdysoneといわれ、ガザミの一種：*Carcinus meanas*では25-Deoxyecdysoneであるといわれている。更に、最近イチョウガニでは3-DehydroecdysoneとEcdysoneが分泌されていることがわかった(図1)。すなわち、Y-organから分泌されるEcdysteroidsは甲殻類の種によって異なることがわかってきた。こうした現状の中、日本ではアメリカザリガニが容易に入手できるにもかかわらず、このような内分泌関係の研究がほとんどみあたらない。そこで我々は、まずアメリカザリガニのY-organからどのようなEcdysteroidsが分泌されているかを、高速

液体クロマトグラフィー (HPLC) 及びラジオイノムアッセイ (RIA) を用いて分析を行った。また同時に体液中のEcdysteroidsの組成についても分析を行った。

〈結果〉

1. Y-organから分泌されるEcdysteroidsの分離パターン

Y-organ培養液を使用して、HPLCで各Ecdysteroidsを分離した後、RIAによって、含まれているEcdysteroidsをEcdysone相当量として求めた。

図2はY-organ培養液より抽出したEcdysteroidsの分離パターンで、このEcdysteroidsと標準Ecdysteroidsの分離パターンとのRetention timeの比較により物質の同定を行った。図2より、Y-organから分泌されるEcdysteroidsの主となるものは3-Dehydroecdysoneであることがわかった。更に、S-3抗体及びH-22抗体の反応性の違いからみても、Y-organから分泌されるEcdysteroidsの主となるものが3-Dehydroecdysoneであるという結論と矛盾しない。すなわち、図2より、Y-organから分泌されるEcdysteroidsは主に3-Dehydroecdysoneであり、少量ではあるがEcdysoneも分泌されていることがわかった。

〈参考〉RIAに用いたS-3抗体、H-22抗体について

S-3抗体は抗原として20-Hydroxyecdysoneの3位にヒト血清アルブミンが結合したものをウサギに注射して得られたものである。この抗原は、ステロイド骨格のA環に修飾があるものは認識するが、側鎖に変化があると反応しにくくなっている。また、H-22抗体は抗原としてEcdysoneの22位にサイログロブリンが結合したものをウサギに注射して得られたものである。この抗体は先のS-3抗体とは逆の反応性を示すため、A環に変化が起きると反応しにくくなっている (図3)。

2. 体液中のEcdysteroidsの分離パターン

体液中のEcdysteroidsの分析はHPLCで各Ecdysteroidsを分離した後、RIAによって、含まれているEcdysteroids量をEcdysone相当量として求めた。また、図4、5のEcdysteroidsの同定はY-organの培養液の場合と同様、標準EcdysteroidsとのRetention timeの比較によって行った。

図4より、体液中のFree ecdysteroidsには主に20-Hydroxyecdysoneが存在し、その他にEcdysone、2-Deoxy-20-Hydroxyecdysoneが存在することが明らかとなった。また図5は、Bond Elut Silicaで分離したConjugated ecdysteroidsをSnail Juice (酵素液) によって分解した後のFree ecdysteroidsとしての分離パターンである。これは図4のFree ecdysteroidsの分離パターンとは少々異なり、ほとんどが20-Hydroxyecdysoneとして存在していた。

〈考察〉

図2より、アメリカザリガニのY-organから分泌されるEcdysteroidsは、3-DehydroecdysoneとごくわずかのEcdysoneであることがわかった。この物質の同定は、既存のEcdysteroids（合成及び精製されたもの）を用いてHPLCから溶出してくる時間（Retention time）及び3-Dehydroecdysone、Ecdysoneに対するS-3抗体、H-22抗体の反応性の違いをもとに行った。更に、（財）サントリー生物有機科学研究所でのMass spectrometryによる同定も行われた。

図4より、体液中のFree ecdysteroidsの分離パターンをみると主に20-Hydroxyecdysoneが存在し、他にEcdysone、2-Deoxy-20-Hydroxyecdysoneが存在している。これは図2のY-organから分泌されるEcdysteroidsとはかなり異なっている。すなわち、Y-organから分泌された3-Dehydroecdysoneは体液中か他の組織で迅速にEcdysoneまたは20-Hydroxyecdysoneに変換されていると考えられるが、甲殻類ではEcdysoneから20-Hydroxyecdysoneへの変換は知られているものの、3-Dehydroecdysoneがどのような代謝系を経由しているかはまだ明らかではない。一方、昆虫のタバコスズメガ：*Manduca sexta*の体液中に3-DehydroecdysoneをEcdysoneに変換する酵素：3-Oxoecdysteroid-3 β -Reductaseが存在することが確認されている。そこで、アメリカザリガニとタバコスズメガでは種の違いはあるにせよ、脱皮ホルモンとして3-Dehydroecdysoneが分泌されているので、アメリカザリガニの体内にも3-Oxoecdysteroid-3 β -Reductaseが存在しているのではないかと考えられる。

ところで、甲殻類においてY-organを除去した場合でも、脱皮周期は遅れるものの、脱皮現象は進行し脱皮する個体もあったという報告がある。そこで、Y-organを除去しても脱皮現象が進行していくのは昆虫で確認されているConjugated ecdysteroids（抱合型エクジステ



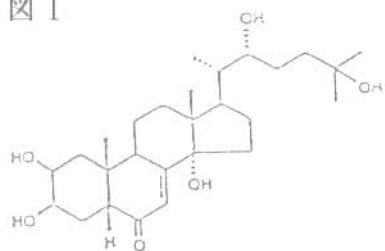
ロイド：貯蔵型として存在し、これが遊離型《Free》となり脱皮に影響を及ぼしている（と一般に考えられている）が甲殻類にも存在するためではなかろうかと考え、体液中のConjugated ecdysteroids及びFree ecdysteroidsについて調べてみたところ、図4、5のようなEcdysteroidsが存在していることが明らかとなった。図5のConjugated ecdysteroidsは図4のFree ecdysteroidsの分離パターンとは少々異なり、ほとんどが20-Hydroxyecdysoneとして存在していた。また、ここでのConjugated ecdysteroidsの酵素的分解にはSnail Juiceを用いて行ったが、一方でalkaline phosphataseを用いて行ってみた。しかし、結果としてはConjugated ecdysteroidsはSnail Juiceでは分解されるものの、alkaline phosphataseではほとんど分解されないことがわかった。これは、体液中のConjugated ecdysteroidsがリン酸エステルではないのかもしれないことを示唆している。

今後の課題としては、まず、Y-organから分泌された3-Dehydroecdysoneと体液中の20-Hydroxyecdysoneとの間の代謝系に介在すると思われる3-Oxoesteroid-3 β -Reductaseの存在を確認する必要がある。また、体液中にConjugated ecdysteroidsが存在していることが明らかとなったので、既知のConjugated ecdysteroids（リン酸基、硫酸基、脂肪酸、糖などがステロイド骨格や側鎖にエステル結合したもの）の諸性質と比較することで、アメリカザリガニのConjugated ecdysteroidsがどのような修飾をうけているか検討していくと共に、生体内でのConjugated ecdysteroidsの機能についても考えていきたいと思う。

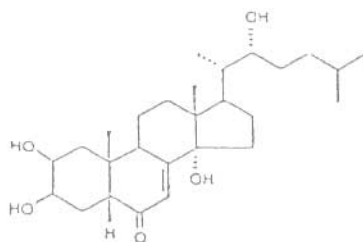
《図について》

- 図1 甲殻類のY-organから分泌されるEcdysteroids
- 図2 Y-organ培養液から抽出したEcdysteroidsの分離パターン
横軸はRetention time、縦軸はその各フラクションに含まれるEcdysteroids量をEcdysone相当量によって表している
- 図3 S-3抗体及びH-22抗体に対する抗原
- 図4 体液より抽出したFree ecdysteroidsの分離パターン
- 図5 体液より抽出したConjugated ecdysteroidsの分離パターン
図4、5の横軸、縦軸は図2と同じ

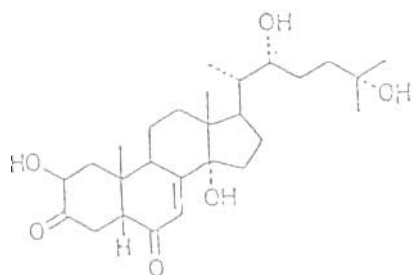
图 1



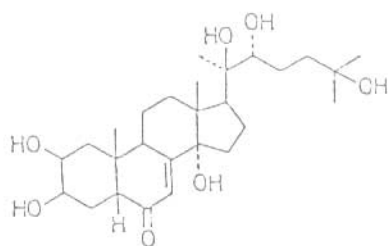
Ecdysone



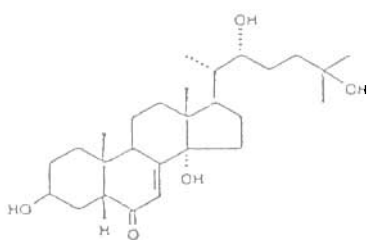
25-Deoxyecdysone



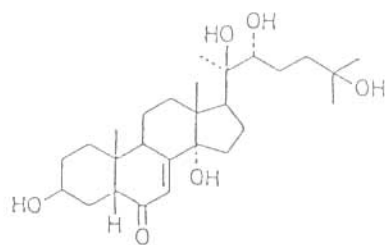
3-Dehydroecdysone



20-Hydroxyecdysone



2-Deoxyecdysone



2-Deoxy-20-Hydroxyecdysone

図 2

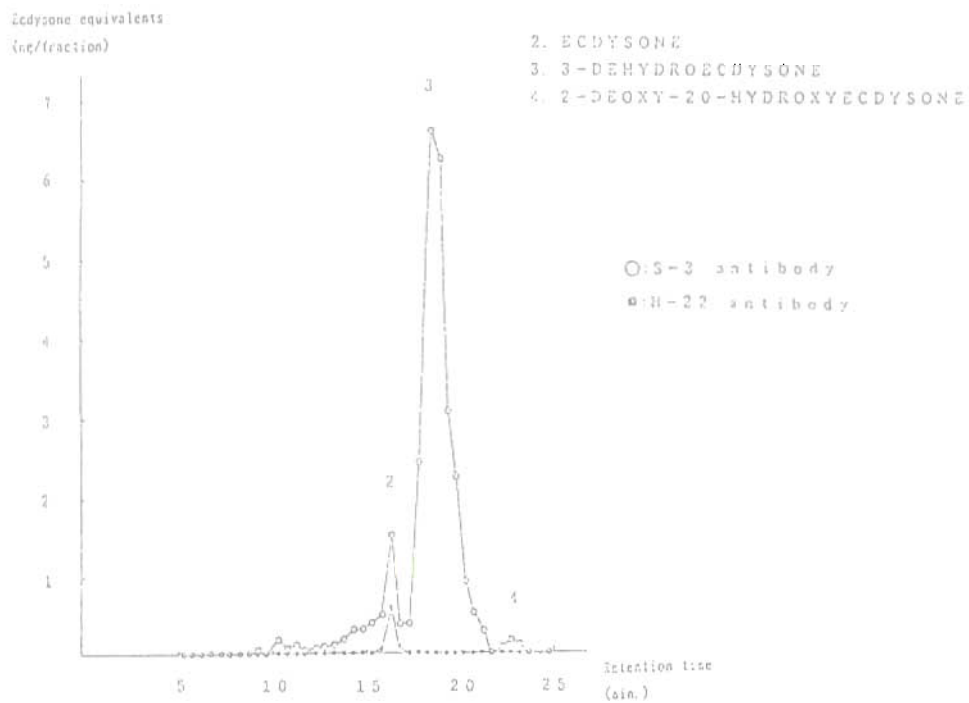


図 3

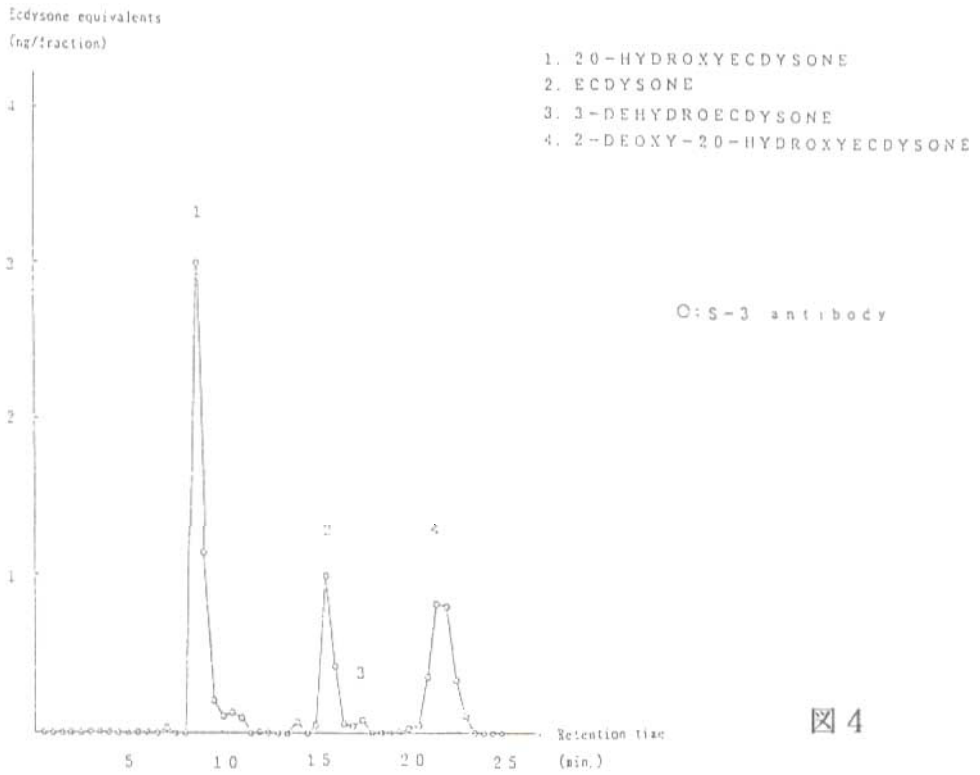


图 4

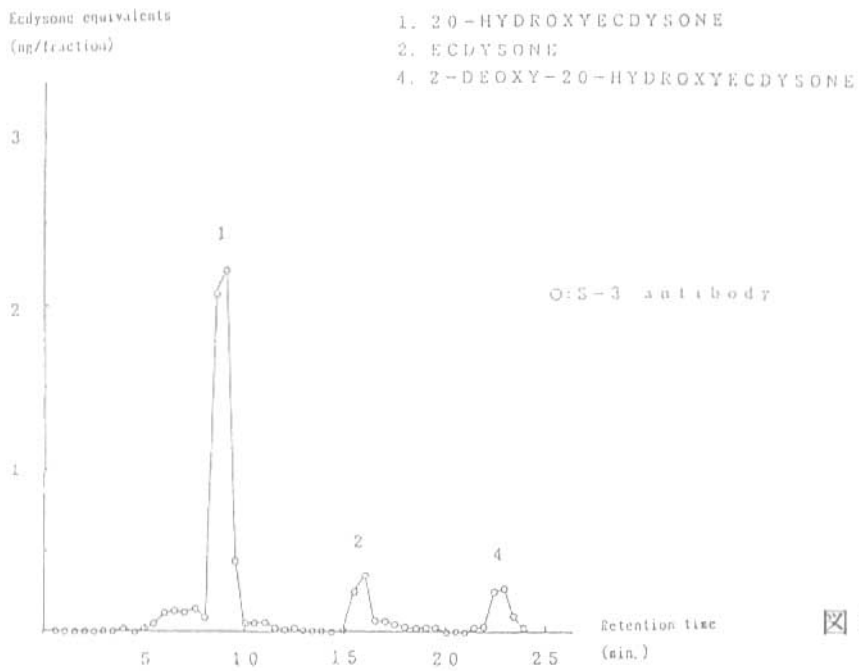


图 5

キイロシヨウジョウバエの雄減数分裂

突然変異系統m144の解析

実験者 甲南大学 理学部 四回生 村松 圭吾
(生物学科 山本研究室)

〈緒言〉

キイロシヨウジョウバエの減数分裂は、その機構が雄と雌の間で大きく異なっていることが知られている。雌の減数分裂がシナプトネマ構造の形成を伴う対合—組換え—染色体分離に至る一般的な過程をたどるのに対し、雄の減数分裂では、その過程に塩基配列の相同性に依存した対合—キアズマ形成を欠き、従って組換えを起こさない。この場合、相同染色体の正確な分配に必要な対合（塩基配列の相同性に依存せず、シナプトネマ構造も形成しないため正確には対合とは異なる）は、各染色体に1～数个存在するpairing siteと呼ばれる特定のDNA塩基配列領域によって行われる。

減数分裂に関与する遺伝子はこれまでに様々なものが知られており、その機能に関する分子レベルの解析も進みつつあるが、pairing siteによる染色体の結合機能については、分子レベルでの解析には至っていない。

雌の減数分裂において、対合／組換えの欠損する突然変異の多くが染色体の分離異常を示すことから、雄の減数分裂でも、pairing siteに欠陥が生じ、相同染色体同士の結合（雌では対合にあたる）に支障をきたした場合、相同染色体の配偶子への分配に異常がみられるものと思われる。

当研究室では数年来、このキイロシヨウジョウバエ雄に特異的な現象であるpairing siteによる染色体分離機構の解明を目的とした研究を行ってきた。今回その一環として野外集団を対象とした減数分裂突然変異のスクリーニングを試みたところ、89年堺において採取された野外集団の中から、雄の減数分裂において染色体分離異常を示す系統が単離された。

本研究はこの減数分裂突然変異系統m144に対し、遺伝学的手法を中心に解析を行ったものである。

〈研究概要〉

減数分裂突然変異系統m144に関して、遺伝学的解析を行った。m144は、野外集団由来の突然変異系統で、キイロシヨウジョウバエの減数分裂において雄特異的な相同染色体対の不分離を生ずる。

m144における突然変異遺伝子の属する連鎖群を特定するために、第4染色体の不分離を指標として連鎖解析を行った。この結果、突然変異遺伝子は第3染色体上に存在することが判明し、この遺伝子をmm(3)m144(mm; male meiotic)と命名した(表1)。

mm(3)m144の遺伝的性質を解明するために、付着染色体系統との交配によって、各染色体毎の不分離率を算定した。この結果、m144系統の雄は全ての相同染色体対で不分離を生ずるが、不分離率は染色体によって大きな差があることが分かった(表2)。なお、mm(3)m144系統雌においては染色体の不分離は認められなかった。

mm(3)m144に対し、これまでに幾つか知られている第3染色体性減数分裂突然変異との相補性テストを行った。この結果、mm(3)m144は、第3染色体左末端近傍にある減数分裂遺伝子mei-1223(Ivy1981)の対立遺伝子であることが分かった(表3)。

m144系統成虫から抽出したゲノムDNAに対し、トランスポゾンp π 25.1をプローブとして、ゲノミックサザンハイブリダイゼーションを行った。この結果、明確なシグナルは認められず、mm(3)m144はP因子の挿入による突然変異ではない事が示唆された。

mm(3)m144遺伝子の遺伝学的座位を決定するために、第3染色体マーカー系統G1 Sb H/TM3を用いてマッピングを試みたが、マーカー遺伝子Sb~H間での組換え体を得られず、逆位の存在が示唆された。そこで、mm(3)m144と野生型系統Oregon-RもしくはCanton-Sとを交配し、F1ヘテロ接合体の唾腺染色体標本作製したところ、第3染色体右腕に逆位が認められた。

〈考察〉

mm(3)m144の遺伝学的性質について

m144は雄の減数分裂において染色体の不分離を生ずる突然変異系統である。遺伝学的表現型は、減数分裂において全ての染色体で相同染色体不分離を生ずるといふものである。この表現型は、各染色体の不分離率が大きく異なり(表2)、特に第4染色体で著しく高く、X染色体で低いという特徴を持つ。

mm(3)m144の機能について

キイロショウジョウバエ雄の減数分裂では、相同染色体の相互認識/結合は、各染色体当り一箇所ないし数箇所の、pairing siteと呼ばれる領域によって行われる。したがって、一箇所のpairing siteが機能を喪失した場合、その結果として生じる染色体不分離は、染色体特異的なものであることが予想され、事実、過去の研究(Sandler et al 1968)によって、そのような突然変異の存在が知られている。

こうした見地からmm(3)m144の表現型を見た場合、この系統で異常が生じている減数分裂の過程は、相同染色体のpairing siteによる結合ではなく、赤道板から極方向への移動であるように思われる。

しかしながら、一つのpairing siteが一つの遺伝子に支配されているという証拠はなく、一遺伝子の異常が全てのpairing siteに影響を及ぼすという可能性も否定できない。実際、宮崎医科大学で行われた

mm(3)m144に関する細胞学的解析によれば、m144ホモの雄の減数分裂細胞核の光学顕微鏡像には、第一減数分裂中期において相同染色体のペアリング異常がみられる。この異常をpairing siteの機能喪失によるものとする根拠はないが、否定的データもなく、検討の余地が残る。

mm(3)m144の機能を染色体の移動に関するものであると仮定した場合、その遺伝子産物として考えられるのはKinesin様モーター蛋白である。Kinesinは微小管に結合し、その上を移動する働きを持った蛋白で、細胞内の物質移動に関わる蛋白質として知られている。相同染色体分離に関するKinesin様蛋白の関与については、キイロショウジョウバエで雌特異的に相同染色体不分離を生ずる突然変異candの解析から明らかにされた(Yamamoto et al 1989, Endow et al 1990)。candは眼色の遺伝子caと、減数分裂遺伝子ncdの、隣接する二つの遺伝子座にまたがる欠失によって生じた二重突然変異である。candにみられる相同染色体不分離は、ncd遺伝子の機能喪失によって生じる。野性型ncd遺伝子の産物は、C末端約360残基にわたってKinesin重鎖のモータードメインと高い相同性を示す領域を持つ、分子量約75kDの蛋白質で、第一減数分裂後期での染色体の極方向への移動に重要な役割を果たしていると考えられている。

減数分裂時に働く遺伝子で、Kinesin様蛋白をコードしているものとしては、ncdの他にnod(Howley et al 1991)が知られている。nodもncdと同じく雌特異的に働く減数分裂遺伝子で、Kinesin様蛋白をコードしているが、ncdが全ての染色体で不分離を引き起こすのに対し、nodは組換えを起こさない染色体でのみ不分離を引き起こす。

これらのKinesin様蛋白は、微小管と染色体の結合を仲介し、染色体の中心体方向への移動に重要な役割を果たしているものと思われるが、ncd及びnodは両者とも雌特異的機能を担っており、雄の減数分裂で同様の働きをもつ遺伝子の存在が予想される。

mm(3)m144の雄の減数分裂における機能が、ncdもしくはnodと対応するものであるか否かを論ずるのは時期尚早に過ぎるが、いずれにせよその分子レベルでの解析は、キイロショウジョウバエに特徴的な減数分裂機構の性による相違に関して、新しいデータを提供するものとして期待される。

〈表1〉

F1表現型	♀		♂	
	[+]	[spa]	[+]	[spa]
雄の核型				
第2ホモ	195	0	195	0
第3ホモ	80	12	78	14

〈表2〉

染色体	不分離率(%)
X	2.75
第2	9.00
第3	5.10
第4	35.48

〈表3〉

系統	相補性
mei-1725	あり
mei-1916	あり
mei-1223	なし
mei-2350	あり

2. 研究生論文

フーコーのアルケオロジー

甲南大学 文学部 研究生 田中 素子

I なぜフーコーが一序にかえて—

「神は死んだ」という言葉とともに、ニーチェによって近代ヨーロッパ理性への全面的批判と否定が試みられてから既に一世紀が経過した。今日、我々は「世界」や「認識」を反省する契機として彼の思想に何らかの有効性があることを認めているが、それを応用・実践するに至っているとは言い難い。人間は、実社会においてまだ、認識の主体であり、因果関係を再認識したり、正偽の判断を下すというように真実を追求することをやめようとしていない。存在の有無は傍らにやられ、「真理」により近づくことが究極の人間の使命でもあるかのように、より細部へ、より深層部へとあらゆることを実体化してゆかずにはおられない。依然、我々は、デカルト的コギトの呪縛から逃れられてはいないのである。

では何故デカルト的思考が反省されねばならず、何故近代的理性が悪いとされるのか、また本当にニーチェ的自己批判が我々に必要なかという素朴な疑問が起こるかもしれない。これらの問いに対し、すぐ人間の意識的・無意識的自己中心の思考による公害・環境破壊の問題、科学技術主導の医療倫理問題、人権問題などの弊害を挙げることができるであろう。人間中心の経済によって生み出された事柄は、人間の自己反省の必要性を喚起するのに充分であり、生命を脅かしつつあるこれらの現実問題を解決すべきと考えるのは当然のことである。しかしながら、「解決すべし」という考えには人間の主観的判断が入り込み、デカルト的コギトは払拭されていない。では我々はどうすれば、何を求めれば良いのだろうか。おそらく「何も求めなくとも良い」というのが答えだろう。だが人間は既に多くのもの・ことを分節し、多くを知り過ぎた。そしてなお思考し続け、何かを求め続けているしかない。その中で自己を反省、変化、解放させる思考の自由を必要とするなら、今のところフーコーのいう《別の思考を考えること》は我々に何らかの示唆を与えてくれるのではないだろうか。それは思索における一種の自己鍛練であり、徹底的自己反省の可能性を秘めた《試み》である。

II 新たなる装置＝アルケオロジー

フーコーは、常に精神病患者、狂人、犯罪者など社会や文化の次元で

のマイノリティーに注目してきた。正常と異常、理性と非理性、合法と違法の分岐点、その構成の場を白日の元にさらし、近代西洋社会における理性の正当性・絶対性の保持と非理性の排除の力関係を知らしめ、「一筋の歴史」に親しんできた我々を少なからず困惑させた。確かにこのフーコーの「歴史」への挑戦は奇異な試みかもしれないがそれは絶対的なものによって価値づけされたすべてのものを各々の場に引き戻し、今まで偏っていた重心を揺れ戻そうとするものである。そういった意味で彼の最後の研究対象『性の歴史』は最も大きな挑戦だったといえるだろう。「性」は抑圧の歴史から解放され、「真理」の「知」として発掘され、やがて「知」となる以前の道徳を構成する諸要素の一つという形に解体されたのである。それは構造主義的方法の応用ではなく、歴史的知の分野において達成しつつある固有の変換について、その原理と帰結を示すことなのである。フーコーの注意は「時代」、「世紀」という単位から離れ、思考の連続性、精神の普遍性、一学問、理論的活動の下に遮断を見いだそうとしている。それは認識をその経験的起源や最初の動機づけから断ち切り、想像との混同・混合から自律させるものである。その基本的姿勢・戦略は記録（ドキュマン）を一つの出来事とする取り組み方である。このようにしてフーコーのアルケオロジエーは既存の伝統的な諸学問の領野を対象にその解体と新たな問題構成をおこなう。次に両者の相違点を軸にフーコーのこのアルケオロジエーという装置を考察する。

a) 「諸観念の歴史＝思想史」とは

それは不確実で境界線のはっきりしない対象に縦横無尽の方法を取って諸学問を再解釈し、一つの限界領域・分析様式・展望を構成し、文学、芸術、道徳などあらゆる人間の認識の領野を引き受ける。それは言説（注1）の再発見を試み、それによって様々な主題は、結び付きをやめ、一つの新しい様態に再組織される。思想史は諸言説をとりまき、表層の変化とは別に下層の普遍性を見だし、一点に凝集する包括的諸形態の分析となる。その大きな主題は発生、連続性、全体化であり、唯一の至高の場へと向うことである。

b) アルケオロジエー（考古学）とは

アルケオロジエーが明確化しようとするのは、諸々の言説中に隠されている様々な思考、表象などではなく、それらの言説そのものである。それは言説を固有の対象とし、「他の言説」を探し求めるような解釈学的な学問やアレゴリーではない。アルケオロジエーは、言説＝実践の諸類型および諸規則を明確化するため、その存在理由としての主体も必要ではない。その試みは書かれた以上のなにもものかに変化させることではなく、「すでに書かれたものの、一個の規整された変換であり、…一つの言説＝対象の体系的な記述である。」（注2）

c) 原（もと）のものと規則的なもの

「諸観念の歴史＝思想史」は言説の領野を価値があり少数なもの、

逸脱しているものと平均的で大量なもの、その派生という二つの価値分野に分け、各々に違う対処を施す。前者は発明、変貌の歴史を担い、後者は中和され、個々の重要性を失う。これらは既に構造化されたものの内に新たな統合、既知の再出現というかたちで起源の問題意識を経験的な個々の要素のうちに託す解釈に過ぎない。

これに対し、アルケオロジー的記述はあらゆる言語運用の中で自己の存在を規定する諸条件を指示する諸言表の《規則性》を明らかにし、それらの等質に配分する。いくつかのアルケオロジー的秩序は年代学的継起を探るだけになるかもしれないが重要課題は言説形成＝編制の場を描き出すことであり、対象の領野にかかわるすべての言表と特徴づけの可能性を明らかにし、構築すべき一つの全体概念を解き明かすすべての言表を配置し、観念に汚染されていない「発見」、新たな概念の「変換」、新しい観念の現出をみいだすことである。いかなる時も哲学的核心などをもとに演繹せず、「時間」という概念に特権を与えるかわりに、自律性のうちに「出来事」を提出するのである。

d) 様々な矛盾への対処

解釈の道具である言説を常に統一している「諸観念の歴史＝思想史」において可視的な「矛盾」は表層上のずれ以上のものでなく、背後に隠されている統一性の幻影という役割しか果たさないため様々な偶然的な現象として抹殺されるか、より強固な一貫性を見いだすための原理として機能するかのどちらかである。

アルケオロジーにとって、「矛盾」は克服すべき仮象でも、秘密の原理でもなく、自己自身のために記述すべき対象なのである。アルケオロジーは「矛盾」を相異なった類型・レヴェル、それが発揮しうる相異なった諸機能などの装置を使い、ポジティブな要素として分析する。多数のレヴェルにおける考察を行い、言説＝実践のうちで働く様々な役割を見定めることを手段とする。アルケオロジーにとって矛盾は一つの対立ではなく、多様な葛藤の空間なのである。

e) アルケオロジーの様々な類比と差異の働き

アルケオロジー的分析とは言説の形成＝編成に対する①《アルケオロジー的同形》の指示、②《アルケオロジー的モデル》の明確化、③《アルケオロジー的配置》、④《アルケオロジー的ずれ》の指摘、⑤《アルケオロジー的相関関係》の五つの働きよる「個別化」の装置である。フーコーの歴史における試みは初出現の出来事という一つの「知」を生み出す言説＝実践を明らかにすることである。それは「知」がその体制・歴史の中でどのように構成されえたかを明らかにすること、つまりエピステーメ（注3）の分析なのである。

フーコーのアルケオロジーという精密な装置は言説を編制し、諸概念の徹底的な分散化がなされる。そして「歴史」はその都度、その往復運動の結果、発掘調査の化石や痕跡となって容貌が浮き彫りにされるのである。

Ⅲ フーコーの意義—結論にかえて—

フーコーによると19世紀のはじめまで名のあるものはすべて等しく一つの表(タブロー)を形成する一つの要素であった。しかし人間は近代的「知」の要請によって現れ、他のものを分節する主体として確立されたのである。以来「真理の探求」に積極的に乗り出し、「諸觀念の歴史=思想史」なるものを編み出した人間に対し、彼は独自の「考古学」を打ち立て、主体を主体経験が構成される際の媒介要素たる「知」にまで分解し、再構成したのである。

個別化、差異化、分散、解体、などいろいろな装置が一つの出来事の可能性を探るため繰り返されてきたが、それは彼の再晩年の著『性の歴史Ⅱ』の中で《問題構成》という表現に結集したように思われる。「真理」を探求するのではなく「いかに真理たりえたか」を解明するのである。従って「真理」はどこにでもあるが、人間の頭の中以外にはどこにもないということをつーコーは知らしめたのである。そう考えると今や我々にはドゥルーズが言うように、多数の着目する点—その諸状態を区別するにつれて自分の位置をずらし、反復のたわむれのなかに存続し存在しうるような点をめぐる思考、が必要なのであろう。そして自分が生きる世界を《問題として構成する》、その場合の諸条件を規定すること—それが思索の歴史の課題なのである。またフーコーは自分の考えを貫徹するためにアルシヴェスト(注4)というスタイルをとり、普遍的知識人と比較して、特定領域の知識人、もしくは専門領域で知的生活の本質的要素である「疑う」ということを仕事にしている職業的知識人であるといっている。そのことは専門領域の中の精緻な研究によって過去のみならず現在においても既にある知の自明性に揺さぶりをかけ、なれ親しんだ思考や態度を解除し、規則とか制度の仕組みやサイズを捉えなおすこと(注5)を実践する彼流の自己への配慮、生存の美なのであろう。

注1 言説(ディスクール) discours

文あるいは言表の連鎖としてまとまった内容をもつ言語表現の意味であるが、ギリシャ語の「ロゴス」logosに由来する語であり、フーコーが使うときは直接的、直観的な表現ではなしに、概念作用と論理的判断をへた秩序のある表現というニュアンスを帯びている。またフーコーはことばの「意味」ではなく、出来事性という意味合いで使用。実際に起こったことであるかどうかではなく、そのことがことばとして出現した(議論に対象となった)こと自体を問題とする。言説を言説ならしめるシステム。

注2 「知の考古学」M・フーコー 河出書房新社 1981 p. 213

注3 エピステーメー

—時代の文化全体の規定にある認識の系、根底的な知。

注4 アルシーヴ(archive) <「古文書」「古文書保管所」

さまざまな言表の形成 (formation) と変形 (transformation) の全般にかかわるシステム。

注5 内田隆三「移動する知」『現代思想 特集フーコーは語る』

1984 10月号Vol.12-12

〈参考文献〉

M・フーコー『知の考古学』河出書房新社 1981

M・フーコー『性の歴史Ⅱ 快楽の活用』新潮社 1986

M・フーコー『言語表現の秩序』河出書房新社 1981

M・フーコー『言葉と物—人文科学の考古学』新潮社 1974

桑田 禮彰ほか編集『ミシェル・フーコー 1926-1984 権力・知・歴史』新評論 1984

『現代思想 変貌するフーコー』青土社 1987 3月号Vol.15-3

『現代思想 特集フーコーは語る』青土社 1984 10月号Vol.12-12

ジョン・ライクマン『ミシェル・フーコー 権力と自由』

岩波書店 1987

和辻倫理学における「人と人との間」について

甲南大学 文学部 研究生 天野 雅夫

何が問われているか

和辻哲郎は、倫理学において何が問われているかを次のように述べている。「倫理学とは、『倫理学とは何であるか』と問うことである。そしてこの『問うこと』は一般的に言って、人間の一つの行為的な存在の仕方である。」(p.130)ではここで言われている「問うこと」とはどのようなことであろうか。

a. 「問うこと」について

「問うこと」という言葉の中には、次の四つの関係が含まれている。一つは「問う者」、二つは「問われる者」、三つは「問われているもの」、四つは「問われていること」である。ここで「問う者」は問いを発する人、「問われる者」は問いを受ける人、そして「問われているもの」はその対象、「問われていること」は行為に関係している。さらにこの四つの関係は「問う者」と「問われている者」との関係の上に成り立っている。この二つの関係なくしては先の四つの関係も成り立たない。つまり、このような構造を持つ「問うこと」とは「人間の問い」なのである。そこで「人間の問い」における「問う者」と「問われる者」の関係について考えてみたい。

b. 「問う者」と「問われる者」

ここで言われている「人間」は単なる個人としての「人間」ではない。そしてまた単なる社会としての「人間」でもない。それは、「世

の中自身であるとともに、世の中における人」(p.130)であり、ここで言われる「人間」とはこのような二重の構造をもった「人間」なのである。

次に「問い」はどのような構造をもっているのでしょうか。「問い」は常に言葉や身振りなどによって表現される。このような表現は、人と人との間柄において初めて表れてくるものである。和辻が「問われる者」をもたない問いを人間の問いの次如態であるとするように、問いは「問う者」と「問われる者」との間にあることである(p.131)。つまり、「人間」が間柄的存在であるのと同様に、「問い」もまた間柄的に考えられなければならないのである。このような間柄的「人間の問い」の上に成立する「問われているもの」と「問われていること」とはどのようなものであり、ことであるのだろうか。

c. 「問われているもの」と「問われていること」

「問い」を志向性として考える場合、「問うこと」と「問われているもの」に区別することができる。つまり、「問うこと」と「問われているもの」に区別することができる。つまり、「問うこと」は志向作用であり、「問われているもの」はその対象である。しかし、倫理学において「問われている」のは「こと」であって「もの」ではない。つまり、それは対象として客観的に観照的態度では把握し得ないものなのである。

d. 「問うこと」と「問われていること」

先に「問うこと」を志向作用、「問われているもの」をその対象と述べたが、「問われていること」は「こと」であるがゆえに単なる客観的对象ではない。それは行為であり、言い換えると、「問うこと」は「問う者の行為」と「問われる者の行為」との間にあり、「問われていること」も同様に「問う者」と「問われる者」との間に置かれていることなのである。例えば、私達が物を「見る」場合、「私」と「物」の関係は「見る者」と「見られる物」の関係であり、それはノエシスとノエマの関係であるといえるだろう。しかし、作用の対象が「物」ではなく「者」である場合、この図式は、さらに複雑なものとなる。なぜなら、人が人を見る場合、見る人は必ず見られる人にとって見返される。つまり、「間柄における働き合い」となるからである。つまり「見る」という作用は人と人との間で行われる以上、単なる作用ではなく作用の連関であり、「行為」なのである(p.141)。このことは「問い」という行為においても同様に考えることができるであろう。

このように「問うこと」と「問われている」は、間柄的行為的連関であり、区別して考えることはできない。行為とは、自と他に別れたものが自他不二において間柄を形成するという運動であるといえるだろう。そして倫理学において、「問われている」のはこの運動であり、このような運動としての人間の行う「こと」なのである。

3. ゼミナール論文

心理療法を考える

甲南大学 大学院 応用社会学科 修士一回生 辻 啓之

§ 1. はじめに

ここでは多くの心理療法のうち、ユング派の心理療法について考えるところを述べてみよう。

§ 2. カウンセリング

カウンセリングとは、社会的または精神的な適応上の問題解決のために、訓練を受けた専門家（カウンセラー）と相談にやってきた人（クライアント）とが相互に心理的影響を与えていく過程と言える。ここでは、ユング派の心理療法家である河合隼雄氏に従って、まずカウンセラーの基本的態度について考察する。彼によると治療場面におけるカウンセラーの基本的態度は、ひたすらクライアントの話に耳を傾けて「聴く」ということである。これはクライアントの悩みを尊重しようとする態度であり、そうすることによって、クライアント本人さえ気づいていない新しい可能性が、その場に生まれでてくるという確信によって裏づけられている。理論的に言うと、これはユングのいう自己実現の過程における象徴機能の作用であり、来たるべき「時」が来れば、表面に現われている葛藤を統合する象徴が無意識下から現われ、新たな段階へと進展することで問題は解消されるという立場に立っている。そして、「聴く」という態度を貫くにあたって、最も重要なことは「待つ」ことである。先ほど来たるべき「時」が来ればと言ったが、この「時」は勝手に訪れてくれるものではない。それは、カウンセラーが、苦しい状況に置かれているクライアントの言葉に無条件的積極的関心に向け、その苦しみを共感的に理解することで、クライアントを支えながら待ち続けて初めて訪れるものである。そのために、カウンセリングは一般にある程度の時間を必要とし、密度を濃くするために、時間や場所を設定する必要があるのである。

§ 3. イメージのはたらき

このように進められるカウンセリングの中で、イメージがどのように関わってくるのであろうか。現実世界からある程度の距離をとって設定された時間と場所において、カウンセラーが開かれた態度で接してくる治療場面は、クライアントにとって守られた場である。この場がうまくできて両者に信頼関係（ラポール）が結ばれているとき、クライアントはカウンセラーの助けを借りながら、内的なコンプレックスなどからくるイメージを自分なりに展開することができる。そのイ

メージは、治療場面でクライアントが話す夢、症状、悩みや、用いられた心理療法（箱庭療法・絵画療法・遊戯療法等）場面、クライアントの態度などにも様々な形で現われる。カウンセラーはこれらのクライアントの言動を尊重して受け取ることで、そこにどのようなイメージが作用しているのかを感じとり、共感的に理解し、受容していくことが大切である。これはイメージの背後にあるコンプレックスを解明することではなく、イメージで表わされるクライアントの内的世界を共に体験することである。そのような体験を続けることで両者の信頼は一層深まり、クライアントはより自由に内的なイメージを展開しだすのであり、その中から象徴作用が生まれ自然治癒力が働くのである。

以上のように、ユング派の心理療法において、イメージは非常に重要な働きをするのであり、そのために治療場面では非言語的なコミュニケーションが重視され、ますますカウンセラーには開かれた態度が求められるのである。

§ 4. 箱庭療法

箱庭療法とは、砂を敷きつめた箱の中に、制作者が好きな玩具を自由に置いていくものである。ここでは、絵画療法や遊戯療法などの場合と同様に、言語的なコミュニケーションを必要とせず、与えられた条件の中で、クライアントは自由な表現をすることができる。特徴的な効果は、次のようなものである。制作者が取り組むにあたっての抵抗が一般的に小さいため、治療場面での導入が容易である。箱という限られた枠の中で行なわれるが故に、そこが制作者にとって「自由に保護された空間」となり、制作者の内的なイメージが現われやすい。さらに、砂に触れることで制作者に治癒的退行がおこり、イメージの発現を助ける。但し、分裂病者などでは退行が強くなり過ぎて危険な場合も生じるので、適用に注意する必要がある。そして、出来上がった作品を制作者が客観的に見ることができると、視覚による二次的な治癒効果があがる。これは絵画療法においても言えることであり、制作者自身が出来上がった作品に驚かされながら、そこに深い洞察や感動を得ることもしばしばである。

このような箱庭療法において、作品と作者の心内のイメージがどのように関係しているのか考察する。箱庭の制作は全く指示されることなく、制作者が自由に行なうため、そこには制作者の心内のイメージが象徴的に表現されることになる。このとき、表現されるイメージは制作者の無意識下のコンプレックスや元型のほか、その場の治療者とクライアントの関係が強く表われる。つまり、治療者とクライアントの間にラポールが成立している場合は、制作者の心内のイメージはかなり深層からも現象し、治療者像と思われるイメージが、治癒を促進させるような形で箱庭中に現われやすい。一方、クライアントが治療者に不満や不安をもっているような場合、内的に深いイメージは現わ

れ難く、ひたすら治療者に対する不満が表現されることになる。この両者は明確に区別されるものではなく、どちらの場合でも、それらのイメージが治療場面において、重要な意味を持つものであることにかわりはない。うまくいっている場合のイメージは、クライアントのもつ問題に関係の深いものであり、そのイメージを治療者とクライアントが共感しながら、その内容を深めていくことで治療が進展し、やがてクライアントの内界から自然治癒力が発現し、問題が統合されることが期待される。そして、治療者とクライアントの関係がうまくいっていない場合においても、そこに現われるイメージを両者が共感することで、その関係を改善していくことが大切である。以上のように、箱庭は様々なイメージの宝庫であり、この作品自体を大切に受け取ることが箱庭療法の基本原則と言えよう。

§ 5. むすび

以上、カウンセリング場面での治療者の基本的態度、イメージの働き、箱庭療法といった内容について、その基本的な部分を考察してみた。ここでは心の構造についての理論に触れずに、心理療法における実践的な側面から書いたのが、ロジャースの来談者中心療法に近い内容になっているが、実際のユング派の心理療法では、ここに書いたような態度と共に夢や症状の分析、解釈が重要な位置をしめることを最後に補足しておきたい。

人間性の回復を求めて

甲南大学 経済学部 四回生 小西 克弥

「肉体は一つの大きい理性である。一つの意味を持った多様体、戦争であり、平和であり、畜群であり、牧人である。」人間は、このような肉体を携えながら、これまで世を生き抜いてきた。ツァラトゥストラは言う「いままでに精神も徳も、百千の過ちを犯し、百千の飛び失せ方をした。我々の肉体の中にも、今なお、これらの迷妄と失策のすべてが住んでいる。それらが、我々の肉体となり、意思となってしまったほどに。いままでに、精神も徳も、百千の試みをし、道にまよった。そうだ、人間は一つの試みだった。ああ、多くの無知と過ちが、我々の肉体となった。」この文章は、この世に人間として生をうけたものが最低限認識すべきことであると思う。そうした意味で、深刻化する一方の環境問題、企業倫理の問題は、現代における人間の無知と過ちの象徴であるが、ここで重要なことは、この文章が、自ら生み出した技術、製品、ひいては文化や価値体系を信じて疑うことなく邁進し、時の豊かさの上に安住している現代人に対する警告を意味し、我々は、そこから学習する義務があるということである。

日本においては、高度成長期から現在まで、物事の価値尺度の基準は金であり、人々はすべてのものが数字で評価されることに疑問を持たなくなった。そこでは、競争社会の常で数字戦争、情報戦争が繰り広げられ、気がつくとも人間は自らの存在を虐げ、そうした戦争の奴隷に成り下がっていたのだ。ツァラトゥストラは言う。「この余計な者どもを見るがいい。彼らは富を獲得し、そのためにますます貧しくなる。彼等は権力を欲する。そしてまず、権力の鉄槌である多額の金銭を欲する——この無能力者どもは。」

人間性を失ったルールなき競争は、愚衆の「市場」において展開され、民衆は、規模の大きいものの演出者と俳優たちの行いから、何が真理かを見抜く目を持っていなかったのも、環境破壊を例にしても地球規模にまで拡大させてしまってから、ようやく「否」を認識し、我々は、これまでの責任をとるべく、具体的かつ早急な対応を迫られている。

こうした中で、“地球に優しいエコロジー商品”なるものがもてはやされているが、本来の意味合いよりも、作り手にとっての有り難い付加価値としての一面のほうが先に見えてしまい、釈然としない気分になるのは私だけだろうか。忘れてはならないのは、これも、同じ演出者と俳優による、ということである。「明日、その俳優は新しい信仰を持つだろう。そして明後日は、いっそう新しい信仰を。かれが素早い感覚をもっていることは、民衆と同じだ。そして変わりやすい天気のような気分を持っていることも。」

そこからいかにして脱却し、真理を見極めるのか。ツァラトゥストラは言う。「これらの性急なもの達を避けて、君は君の安全な場所に帰れ。市場においてだけ、人は『賛』か『否』かの問いに襲われるのだ。」「市場と名声とを離れたところで、すべての偉大なものは生い立つ。市場と名声を離れたところに、昔から、新しい価値の創造者たちは住んでいた。」

もう一つの例として挙げられ、近年、世間を揺るがせている企業倫理の問題にしても、根は同じであり、競争の激化により、数字が、人間性を抹殺してしまったことに気付かずに、人間不在の商売をしていたのが原因である。それが、人殺しという究極の形に繋がってしまったのが、今回の湾岸戦争であったように思う。フランス軍の兵士は、自国産の最新鋭戦闘機と戦い、自国が原料輸出した毒ガスに対して恐れおののいていたのである。日本においては、金融機関が、利益最優先で貸し付けを行ったがために、地価が急上昇し、経済に様々な影響を与えたことなど、かなり具体的な形で影響が出てきたので、これから、21世紀にかけては、これまでないがしろにされてきた人間性回復の時代に向かうと思う。すべての価値基準が、限りなく人間に近いものになるのである。

基本的に、人間の求めるものは時代に関係なく、不変なものなのだ

が、文明の発達による思い上がった考えや、時代の波が、人の視点を狂わすので、あるときは非常に崇高に思っていたことが、時には見えなくなることがある。そこで独自の視点を持ち、真理を確立し得た者が、その時代における新しい価値の創造者になる。

ツァラトゥストラは言う。「諸々の価値の根源は人間である。人間が、己を維持するために、それらの価値を諸事物に、賦与したのである。——人間が元で、それが諸事物に、意義、人間的意義を作り与えたのだ。それゆえ、かれはみずから『人間』、すなわち『評価するもの』と呼ぶのである。評価は創造である。君たち、創造するものよ、聞け。評価そのものが、評価を受けるいっさいの事物の要であり、精髓である。評価することによって、初めて価値が生まれる。評価されることがなければ、生存の胡桃はうつろであろう。このことを耳にとどめよ、君たち、創造するものよ。価値の変動——それは創造するもの達の変動である。創造者とならずにおられないものは、常に古いものを滅ぼす。」

さて、これからの世の中、本当の意味での人間性の回復を、勝ち得ることができるのかどうか、私にも僅かながら責任がある。

V

甲南大学総合研究所

甲南大学 総合研究所所報

甲南大学総合研究所 神戸市東灘区岡本8-9-1 電話(078)431-4341

人間の深層心理と社会の深層構造（深層心理研究）
（甲南大学総合研究所 研究番号24 1989年4月発足）

◎研究内容の概要

人生観・世界観の喪失の下に、現代に生きる人々は人間疎外を経験している。それは単に人生の目的や社会の進行方向の喪失を示すのみならず、人間存在自体が危機状況にあるといえよう。その主要な原因は、文化・学問における実体化された合理主義的思考方法（例えば、文化・学問のフェティシズム）によるといえる。

そこで、本研究の目的は、そのような硬化した知的枠組みを水平・垂直軸から捉え直し、再構築することを意図する。つまり、一方で、文学（象徴主義・ロマンティシズムの再評価）、哲学（合理主義批判）、心理学（呪物崇拜批判）、医学（健康至上主義批判）、経済学（金銭至上主義批判）等の諸分野が交流をもつとともに、他方、それぞれの分野における深層構造を多層的に明らかにし、合理主義、非合理主義の枠を越えた知のパラダイム転換を行なう。

◎研究の特色

深層心理の問題を、単に「人間の深層心理」のみに留まらず、「社会の深層構造」にまでパースペクティブを拡げて考察する。そのため、前者については、文学、哲学、心理学、精神医学の諸見解を検討し、後者については、人間が置かれてある「場」としての社会を、経済発達、社会病理、大衆心理、環境医学の諸問題を通じて吟味することによって、その深層構造を明らかにする。そのような個と全体の深層構造を分析することが、本研究の特色である。

◎研究の必要性

人間の深層心理と社会の深層構造を総合研究することによって、新しい学問の再構築と人間疎外の解消がなされよう。現代においては、このような総合研究が強く要請されている。

◎研究チームと研究分担

佐藤 明雄（文）心身論新考

谷本 泰三（文）アメリカ文学と非合理的世界

- 織田 尚生（文）人間における深層心理
 寺島 樵一（文）文学表現における象徴性
 ○谷口 文章（文）新・心身関係論
 森 茂起（文）心理学における現実と非現実
 永友 育雄（経）経済学における非合理的要因
 藤本 建夫（経）都市化の大衆心理
 中川 米造（滋賀医大）医療のミトロジー
 氏原 寛（大阪市大）意識の場
 小出龍太郎（浪速短大）モーパッサン文学の深層構造
 瀬尾 博（精神科医）精神医学における諸問題
 杉林 稔（精神科医）ライフサイクルにおける精神的危機
 小谷 英子（大阪大）人間存在の実存的課題

○：研究会幹事

第12号

Institute for Interdisciplinary Studies KONAN University

1990年11月30日

甲南大学 総合研究所所報

甲南大学総合研究所

神戸市東灘区岡本8-9-1

電話(078)431-4341

平成元年度研究課題報告

「隠されたもの」と「幻想の未来」

谷口文章

本研究会も1年半が過ぎ、その性格と成果が明らかになってきた。個人の深層心理と社会の深層構造のメカニズムを解明すべく、活発な研究討論が14回にわたって続けられてきた。ここにその経過をエッセー風に述べたく思う。

1) 基盤としての「隠されたもの」

従来、唯一の真理を個人においても社会においても明らかにすることが、学問の営為と考えられてきたが、そのような不変の真理（実体的思考から生じる）を求めることが可能であろうか（筆者）。その観点からは、流動流転するリアリティーは十分に把握し得ないと思われる。自然科学における客体性、社会科学における合理性、人文科学における自我性などの概念は、それぞれの分野の主体性、非合理性、非自我性の問題を隠蔽してきたとも考えられる。実のところ、各分野における明るい側面、特定できる側面は、それぞれの暗い側面、不特

定な側面に支えられて成立している。そして、現代のあらゆる学問分野では、不確実、非合理、非我的なものが噴出し、新たな知的地平が早急に求められている。したがって、個人と社会の背後に隠された統一者が問題とされねばならないであろう。

2) 個人における「隠されたもの」

文学の世界では、霊的次元の「無言」の影によって開示された、理性・言語を越えた世界（谷本泰三氏）や、自然主義文学におけるペシミズムとその深層解釈の問題（小出龍太郎氏）が取り上げられた。また、文学作品の言語的表現という表層と内容という深層の対立把握をさらに進めて、作品の背後にある根源的な古典的合意の上に成立した表現行為が問題とされた（寺島樵一氏）。

文学の世界は架空あるいは虚構の上に構築されたものと考えられがちであるが、むしろ人間の本性に根づく想像界がそこに展開されるからこそ、リアリティー迫る純粋な結晶がみられるのである。現実の現象のみ表現する場合は、「物語が、お行儀よく、上品な言葉で、善意に満ちて、信心深い語調で語られていればいるほど、それをひっくり返し、裏側から読むことがたやすくなる」（バルト『テクストの快楽』）のであるが、心ゆさぶる文学は深層の見えざる根底に触れているのである。

さらに、深層心理学の分野からは、現実では考えられないが心性としてはあり得る世界創造の考えが示された（織田尚生氏）。たとえば、世界創造の神話・伝説は近親相姦によってなされることが多いが、それは、その深層の象徴的な結婚を儀礼として行うことによって、現実の行為は避けられ、心の安定感や社会秩序を得ていると考えられるのである。また、臨床場面で患児に接する場合、一方で子供の自我形成に母親の投影が見出され、他方母親は現実の子供のみならず彼女の内面にある子供像、ひいては家族全員の像を語ることになる。このように臨床心理でも、患者個人の深層心理だけでなく、患者の背景にある人間関係を洞察せざるを得ないのである（森茂起氏）。

深層心理学は、個人の無意識の世界を分析するが、それを突き詰めれば普遍的なもの（世界創造や家族・人間一般）を考察せざるを得なくなる。そして興味深いことに、個人の意識から出発して無意識を経たあと、再び現実の分析に戻る。深層における「見えざるもの」が言語化されることによって、普遍性と現実的客観性を獲得していると言えようか。「心理的存在は、一個の理念がたった一人の個人の中に現れているだけといったような場合には、主観的なものです。しかし、このような理念が『一般的同意』によって一定数以上の人々の共有になった場合を考えると、それは客観的なものといえるのです。」（ユング『人間心理と宗教』）。

3) 社会における「隠されたもの」

まず、経済学の分野では、家計と企業は効用と利潤極大化の原理で

動くとは常識的には考えられてきたが、人間は必ずしも合理的要因だけでなく、奢侈や名誉など非合理的な要因でも行動している。しかし、そのことは現在の経済理論では無視されるという非合理性や、また他方研究者という主体が、自己の理論を普遍妥当なものと考え、事実を無自覚に歪曲するという非合理性も存するのではないかと考えられる（永友育雄氏）。また、ウェーバーは、近代化・合理化の果てに「精神なき専門人」の登場を予言し、宗教なき時代の生と死の無意味化に言及し、近代合理主義のもつ負の問題性を伝えようとした（藤本建夫氏）。

このように考えられるとするなら、功利主義の実践と技術的合理性に立脚した従来の経済学の知識は、隠されたものを十分に明らかにできない。たとえば、労働の機械化・人間疎外・環境破壊・公害などが結果したのは、等身大の価値基準を越えて、エコノミー（家政、経済）がエコロジー（生態）から遊離し、自然の再生産の速度を無視したためではなかろうか。「農業では、自然も人間と並んで労働する」（スミス『国富論』）。

次に医学の分野では、生きた人間からではなく、死体解剖から出発したことに象徴される近代・現代医学によって、病気をみて病人をみない医療、医者－患者関係の歪み、医原病や医療費の増加が生み出されてきたと考えられる（中川米造氏）。また、精神疾患の人々を排除するのではなく、彼らとのポジティブなコミュニケーションを試みる立場（杉林稔氏）や、病者である以前の人間存在に備わっている「生きることの意味に対する意志の自由」を尊重する立場（小谷英子氏）は、言語・文化・制度・体制に抑圧されている現代人に示唆を与えてくれることになる。

医学こそが患者を救うという神話は、人間の物化や差別、主体性の喪失を生み出した。医学モデルによって隠された人間・治療関係の在り方こそが反省されねばならないのだろう。「治療は時の経過による、しかし機会によることもある。しかし、医療は、このことを知りながらもあらかじめもっともらしい理説を頼りにこれを行うのではなく、実地に理説を配しながら行うのでなければならない」（ヒポクラテス『古い医術について』）。

4) 「隠されたもの」と「幻想の未来」

「人々は何も知らぬことを知るために、いかに多くを学ばねばならぬか、それを知る人のいかに少ないか」というドイツの古い諺があるが、人間の知が神のまえにいかに小さく虚しいかということ、人は今悟るべきである（佐藤明雄氏）。

現代は、新々宗教やオカルトブームの時代と言われる。なぜ、真摯な若者たちがそのようなものにひかれるのか。occultとは、「隠れた」、「神秘的」、「肉眼で見えない」、さらに「見えなくなる」、「明滅する」という意味がある。このような意味をもつ語によって表されるブーム

は、現代人が隠されながらも明滅している真理を垣間見ようとあえいでいることの証左ではないであろうか。つまり、現代のあまりにも明るすぎる状況が、影や闇への郷愁を生み出す。それは、草木が明るい世界を求め、枝を上へ伸ばせば伸ばすほど、大地の暗闇へと根を張らざるを得ないのと同じである。そのように、人間には明暗一体の基盤が必要不可欠なのである。

人間の精神文化および物質文明は、いわば一種の宗教的教理と考えられる。それらは「イズム」として、人間が価値あるものとして恣意的に信仰しているだけに過ぎないのではなかろうか。「宗教的教理はすべて幻想であり、証明不可能で、何人もそれを真実だと思ったり、信じたりするよう強制されてはならない」(フロイト『幻想の未来』)と言われるように、現代の“高尚な”文化、“高度な”文明は幻想であって、隠された生命の土壌に根づかない宗教的イズムに堕ちているようだ。本来の宗教的なるものは、イズムにとらわれることなく、人間を越えたものとして実感されるべきものであろう。その意味で、人間の知的営為が「幻想の未来」を作り出しているとするなら、人間が畏敬せざるを得ないものに目覚めなければならないのではないか。さもなくば隠されたものを実感することなく、明確だと錯覚した幻想に人類の未来を託することになろう。

甲南大学 総合研究所報

生命概念に関する研究(研究No.30) 平成二年度共同研究中間報告

中村 運

生命概念は、おそらく疑うことを知り、知ることを求める人たちによって原始の時代から究理され、論議されたであろう。したがって、この語は深く、そして広く人類社会に浸透したと考えられる。それだけに生命は、民族、宗教およびその他の特定の集団において、時代の変遷を経ながらさまざまに概念づけられてきている。今日それを統一的に定義し、論考することはほとんど不可能な状態である。

本研究チームは、今日におけるこのような生命の概念を、分子レベル研究に基づいて(分担中村 運)、生態レベル研究に基づいて(同

田中 修)、哲学研究に基づいて(同谷口 文章)、および法学研究に基づいて(同齊藤 豊治)考察し、最大公約数としての生命をどのように定義できるかを追求することにした。このような専門分野を超えた包括的な生命概念の研究は、国内はもちろん、国際的にも希有であろうと思われる。

本チームでは、1990年4月以来原則として毎月勉強会を開き、分担者による研究報告とそれを中心とした質疑応答を行ってきた。当初は各専門分野に概念の違いは大きく、さらに用いられている専門用語も相互に理解し合えないほどであったが、会を重ねるごとに相互に相手の概念に対する理解も深まりつつある。

本報告では、相互の専門的概念を抱擁した上で、各分野において生命をどのように概念づけうるかについて、中間的に研究発表するが、これは後日作成される最終報告における各分担者の論考の方向を示すとともに、さらにチームとしての総合的な方向づけをも示す予備報告である。次は、各分担者の専門的分野からの報告である。

1. 分子レベル研究に基づく生命概念 (理学部教授 中村 運)

自然科学としての分子生物学は、生命現象をある物質系の発現する属性であることを基礎として、(a)その生命現象に関与する物質系はどのような化合物から成るか。(b)それらの化合物が非生命系から区別される物理的・化学的特徴は何か。(c)生命系の化合物は個々にどんな特徴的分子機能をもっているか、またそのような分子機能を発現する原子構成はどのようなものか。(d)生命という総合的属性を発現するのに、個々の分子種間でどのような相互作用が起こるか。(e)それら少数の分子間相互作用は多分子形の中でどのように変形されていくか。(f)その変形と調節がどのような方向を向いたとき、総和としての生命属性が発現されるか、へと研究段階を進めていく必要がある。ところが現在ではこれらのごく初期段階にしか生命科学のレベルは達しておらず、最終段階、つまり生命属性の発現機構の全解明が可能か否かについて、人類の究理能力を疑問視する科学者も多い。

しかし、生命概念としての分子機構の在り様はある程度まで設定することは可能であると報告者は考える。今日までの生物学的研究は、各研究者が生命属性のごく微小な領域にメスを入れている程度にすぎず、したがってこれらによって解明された諸事実を素材として全体的な生命像を構築することは至難といわなければならない。

過去の生命科学は、他の自然科学分野と同じく、ほとんどすべてが分析的で、還元的方向へ進められている。しかし生命属性の解明は、個々のデータを素材としたところの総合化にある。その意味で、自然科学研究の方向は大きく転換されなければならない。

2. 生態レベル研究に基づく生命概念 (理学部助教授 田中 修)

生物の世界は、小さいものから、原子→分子→細胞→組織・器官→個体→種個体群→生態系のように統合される。この中で、生物と無生物との境界は分子→細胞の間に位置し、そこで「生命の定義」がなされている。定義される生命の本質は変化しないが、統合レベルが上がると生命現象は多様化する。そのために統合レベルが異なると「生命の概念」は微妙な違いを生じてくる。そこで報告者は生物の各統合レベルでの「生命の概念」の違いを把握することで、「生命の概念」を整理しようと試みている。

各統合レベルでの「生命の概念」は現在研究途中であるが、一年目の勉強会では次のようなことが認識されつつある。低次のレベルほど物理科学的法則がむき出しで現れる傾向が見受けられるのに対して、高次のレベルの生物ではホメオスタシスの重要性が浮かんでくる。この語は個体レベルでの「内部環境の恒常性の維持」として定義されるが、幅広く解釈すれば、どの統合レベルにおいても「生きている」という現象をよく把握できる概念といえる。

また、「生命の概念」は、統合レベルによる違いだけでなく、人間、動物、植物というような生物の質的な差異に基づいて異なってくる。生命の本質は、生物間において区別はないが、その価値観は異なっている。生物の質的差異に由来して、「植物的生命」や「動物的生命」という語がある。多細胞生物の「生命の概念」を把握するには、このような生物の質的差異に基づく整理も必要であろう。

3. 法学研究における生命の概念（法学部教授 斎藤豊治）

社会の規範としての刑法においては、動植物の生命一般ではなく、人の生命が絶対的といつてよいほど重要視される。初年度の研究では、この人の生命を対象として、刑法上の生命の概念を分析した。ここでは、人の始期に関して、(1)「胎児」となるのはどの時点か、また(2)胎児とは区別して「ひと」となるのはどの時点かが考察され、人の終期に関して、伝統的な心臓死を中心とする死の概念と「脳死」の問題が検討された。さらに安楽死・尊厳死との関連で生命の処分権および人工的な生命維持の問題が分析された。

勉強会では、生命は生態系、生物群集、種個体群、個体、器官・組織、細胞、分子、原子にいたるそれぞれの段階において、重層的に考察され、さらに地球における生命の起源に関して壮大なスケールで検討が行われている。こうした検討が、刑法、もしくは広く法律における生命の概念にいかなる意味をもつかが、今後の研究課題の一つといえる。

差し当り、遺伝子工学に関する倫理的、刑法的な問題や環境刑法の問題が重要であろう。後者に関していえば、この領域は、当初「公害」という形で問題が提起された。しかし、「公害」があくまで、現に生活しつつある人々の生命、身体、財産を保護するという意味合いが強

く、人間を中心とする発想であるといえる。これに対して、環境刑法では、人間も含んだ環境自体をひろく保護するという発想が強いといえよう。

4. 哲学研究における生命の概念 (文学部助教授 谷口文章)

Life (英)、Leben (独) の語義には、大きく分けて「生命現象」と「生き方」という意味がある。生命現象を多層的に把握するためには、基底となる多様な環境も考慮されなければならない。なぜなら生命と環境とは同時に生じたポジとネガの関係にあるからである。

まず「生命現象」は物理的・生物的環境において成立する。分子生物学では原子、分子、細胞を、生態学では個体、種個体群、生物群集、生態系を対象とする。前者は物理科学的法則を、後者は社会科学的法則を通常は適用する。しかし、こうした要素還元主義のみでは、生き方はもちろん、生命現象も充分には説明できない。そこで、生命を分子などに還元するのではなく、細胞という「小さな全体」を前提にすることが必要となる。生命の最小単位を細胞として出発するなら、生命は(1)代謝による自己保存の機構、(2)細胞分裂による系統維持、(3)時間性における変異と進化という属性をもつ(中村説)と考えられる。

この立場を踏まえて、生あるものは死を迎える必然性のもとに「生き方」という人間臭を帯びた広義の生命の概念を明らかにしなければならないと考える。例えば、脳死判定により生命概念が社会的に拡張され、ホモ・サピエンスである人間が作り出した文化という幻想によって精神病理の現象が生じている。つまり社会的・文化的環境は、生物学的生命を変質せしめるのである。以上のことから、生物学的な生命現象と社会・文化的な生き方を抱摂した生命概念が新たに要請されるのである。

2. 研究発表要旨

経済学における合理性と非合理性
—— シュンペーター学説を中心に（試論） ——
甲南大学 経済学部 教授 永友 育雄

（以下は、平成2年11月20日の研究会での報告の要点を再現したものである。）

1. はじめに

シュンペーター（1883-1950）は、経済学の偉大な教師であり偉大な経済学史家であり、彼自身の経済理論は複雑で広い範囲におよんでいる。（Mark Blaug, Who's Who in Economics, Second Edition, 1986.）私はこの人の経済学に大きな興味をもっている。ここで彼の特徴ある経済学をとりあげてテーマに接近してみたい。

彼の経済学の特徴を最も際立って示しているのは、1912年に初版が出て、1926年に第二版が出された『経済発展の理論』という書物である。（その第二版からの邦訳が岩波文庫で上下の二冊本で出ている。以下これを用いる。）

彼のこの書物で、私が最も大切だと考えるのは第二章「経済発展の根本現象」（邦訳上巻）と最終章である第六章「景気的回転」（邦訳下巻）の二つの章である。そして彼の学説は「資本主義経済では経済発展は波を打って進展する」という主張をくりひろげるものであり、「発展波動論」とでも呼んでよいようなものである。

だが、この報告は彼の「発展波動論」そのものをとりあげるものではない。そうではなくて、ここでは第二章のみをとりあげ、しかもその章の一部分のみ、すなわち経済発展を担う経済主体としての『企業者』の活動の動機に関する議論に焦点を合わせて報告を進めていきたい。

2. 経済発展とは

話の順序として、まず経済発展についてふれておかなければならない。

シュンペーターによれば、経済発展とは、経済体系の内部から生じる生産の領域における急激かつ根本的な変化のことである。（邦訳上巻 pp. 171, 173.）これを、生産革命とも呼んでいる。（同 p. 173.）

ところで、このような生産革命は生産の仕方が従来と同じままでは決しておこりえない。生産の仕方が変わらなければならない。彼は生産を生産要素の結合であると考えるので、新しい生産の仕方とは生産

要素の結合の仕方の変更としてとらえられる。それを彼は新結合と呼ぶ。生産での新結合が生産の世界を革命し、経済に発展をもたらすというわけである。

彼によれば、この新結合には5つの場合がある。(同 pp.182-183)

1. 新しい財の生産
2. 新しい生産方法
3. 新しい販路の開拓
4. 原料あるいは半製品の新しい供給源の獲得
5. 新しい組織の実現

である。このようなさまざまな新結合によって、新しい生産力が準備され、やがてそれが出現して市場に流れだし、経済生活の中に吸収されていくのであると、考えてよいであろう。そのような経済の動きが経済発展なのである。そしてそれを支えているのが新結合によってまきおこされている生産革命の展開である。

ここで有名な文章を一つ引用しておこう。「郵便馬車をいくら連続的に加えても、それによってけっして鉄道をうることはできないであろう。」(同 p.180 の注)。郵便馬車から鉄道への変化は典型的な新結合であり、急激かつ根本的な生産の革命なのであり、経済発展の一翼を担った一つのバック・ボーンなのであった。

3. 経済発展の担い手

経済発展は新結合によってひきおこされる。では新結合を遂行する経済主体は誰か？シュンペーターはそれを「企業者」と名づける。だから彼の言う「企業者」こそは経済発展の担い手なのである。そして新結合を遂行する経営体を「企業」と呼んでいるのである。(同 p.198.)

この言葉づかいは、私たちの日常の言葉づかいは異なっている。世間で広く使う用語法では、新結合と特に関係のない経営者や経営体のことをも企業者とか企業と呼んでいるのではないだろうか。だがこのことについては、用語法にそのような相違のあることに注意しておけば、あまりうるさく議論することもない。

ただ、シュンペーターには彼の「企業者」に対立する経済主体、つまり従来生産の仕方をそのまま繰り返し繰り返し実行して旧来の生産をつづけてゆく生産の主体のことを「単なる業主」と呼んでいる。(同 p.213.) 「単なる業主」の活動によっては従来生産力は保存されても新しい生産力は決してあらわれない。

だが「企業者」といい「単なる業主」といっても、それは理念型の概念であり、頭の中で考えられた極端型の概念である。現実ではその中間に、ある場合には「企業者」に近く、ある場合には「単なる業主」に近く、という具合の性格の多くの生産の主体が活動しているのである。

さて、経済発展の担い手は新結合を遂行する「企業者」である。そこで次に「企業者」活動をめぐる「企業者」自身の問題に視点を移してゆきたい。

4. 「企業者」論

a) 「企業者」が直面する困難

世間の中において新しいことを実行することは、場合によっては程度の差はあっても、いつも必ず難しい。新結合もその新しいことの一つの例である。「企業者」はその困難にうちかって新結合を遂行しなければならないのである。

まず、何と言ってもどのような新結合を構想するかが大変である。「決断のための与件や行動のための規則がなくなってしまうのである」(同 p. 223.)。一人では事業は出来ないとすれば仲間を集める説得力が要る。資金を調達するのにも貸手(銀行)を説得する力量が要る。このような困難を克服して進むことは普通の人では難しいのではないだろうか。それでも「企業者」は進む。

では、彼らを推し進めるのは何であろうか。ここで「企業者」の動機に眼を移そう。

b) 困難に立ちむかう動機

シュンペーターはここで三つの動機をあげる。(同 pp. 245-247)

第一に「私的帝国を、また必ずしも必然的ではないが、多くの場合に自己の王朝を建設しようとする夢と意志」である。

第二に「勝利者意志」である。“俺は断じて勝つのだ、という意欲というか決意というか、なにかそのようなもの”のことであろう。そして「利潤量は……勝利の記念柱」にすぎない、というのである。

そして、第三に「創造の喜び」をあげて、「変化と冒険とまさに困難そのものとのために、経済に変化をあたえ、経済の中に猪突猛進する」としているのである。

「企業者」を推し進めている動機はこのようなものである。事業の世界での巨人の伝記などを読む時、シュンペーターのこのような動機論の本当であることを私は感じる事が出来る。

今、やっとこの報告の核心に近づいた。(だが、もう余白は少ない。全力をつくして急ぐことにしよう。)

問題はこうである。ここにあげられた三つの動機は、果たして合理的なものであるかそれとも非合理的なものであろうか。合理的なものであるとはなかなか言いがたい、ということについてはあまり異論も無いのではないだろうか。シュンペーターも「新しい方法の選択は自明のことがらではなく、それ自身合理的経済行為という概念にふくまれた要素ではない」と言っている。(同 p. 212 の注)

もっとも、新結合には合理的側面が全く無いと言ってもよいかどうか

かには疑問がある。というのは、競争相手が新結合に乗り出している場合に、当方がぼんやりしておれば業界から追い出されてしまうかもしれない。とすれば当方も新結合に乗り出すのが当然であり業界に生き残るといふ観点からみれば合理的なことである。

このように見てくると「企業者」活動をめぐって、非合理的なものと同合理的なものとの同時からみあっているように思われる。

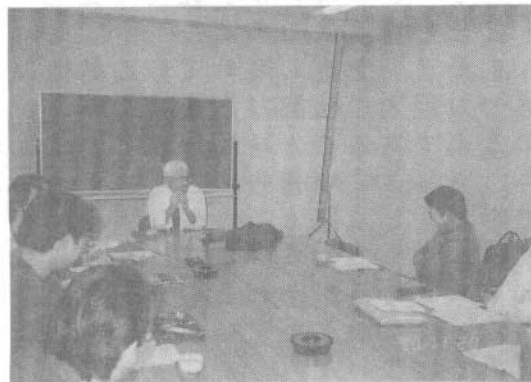
まず、「企業者」を駆り立てる動機はシュンペーターの三つの動機にみられるような合理性とは縁の遠い情念のようなものである。つぎに、企業間競争の面からみれば、新結合への対抗としての新結合には十分の合理性があるものと思われる。「企業者」活動の中には非合理性と合理性とが渦を巻いているのである。おそらくはこれが真相ではないだろうか。

5. 合理性の限界と非合理性の意義

最後に、少し自由に考察をすすめることをお許し願いたい。実はこのような考察が成り立つものかどうか、私自身迷うのである。テーマの副題に「試論」としているのもそのためである。

さて、経済発展の中にあつて人々は大きな利益を得ている。まずこのことに注意しよう。(今日の産業の発展は発展の利益だけでなく、他方では環境問題をひきおこしている。この問題については機会を改めたい。)ところがこの発展の利益は、言うなれば「企業者」活動のおかげでもあるわけである。そして、これまで考察してきたように、「企業者」活動を推し進めているものは、一面からみれば「企業者」の動機論に出てきたような非合理的な情念であり、他面からみれば業界での生き残りをめざす合理的な企業経営の新結合活動である。だとすれば、発展の利益を得るにあたって私たちは合理的なものと同非合理的なものとの両者のおかげをこうむっているということにならないだろうか。ところが他方では、合理的なものはよろしいが非合理的なものはよろしくないというのが、私たちの普通の常識みたいなものになっていないだろうか。もしそうだとすれば、私たちの常識の方が訂正されなければならない、ということにならないだろうか。

こうして、次のように言えないであろうか。合理性にも限界がありうるし、非合理性にも意義のあることがある、と。



永友教授発表

ドイツの自動販売機

甲南大学 経済学部 教授 藤本 建夫

1.

1989年夏、ドイツ学術交流会（通称 DAAD）に招かれて、12年ぶりに西ドイツを訪問した。ドイツはこの年の11月9日にベルリンの壁が崩れ、さらに翌年の10月3日に東西両ドイツの統合が達成された。この間、日本のジャーナリズムも随分とドイツに注目し、さまざまなニュースを報道した。そのためもあって、ドイツは私たち日本人にとって、今まで以上に身近な存在になりつつあるように思われるけれど、しかし、平均的な日本人にとっては、今日のドイツのイメージはやはり、フォルクス・ワーゲンやベンツの国、ヨーロッパで最も経済力のある国、であろう。

日本とドイツの近・現代史、表面的には非常によく似た運命を迎っている。近代的な統一国家が誕生するのは、日本が1867年、ドイツが1871年とほぼ同じ時期であり、天皇制ファシズムとナチズムを体験して両国ともに第二次世界大戦に敗北し、そして戦後は、間接、直接の違いはあれ、被占領の時期を経て、驚くほどの経済成長を遂げ、今では世界の中で最も「豊かな」国になっている。こうした表面上の歴史過程の類似性とは裏腹に、ドイツ人は、日本人と違って、意外なまでに生活スタイルが保守的で、秩序やルールにこだわる国民性を持っているようである。ドイツに住んで少しでも周りを注意してみると、それがよくわかる。

2.

私は3ヶ月間の滞在で、最初の1ヶ月はマールブルクの郊外、車で30～40分もかかる小さな村ポッテンホルンに、残る2ヶ月はマールブルク市内で、大学の研究室まで徒歩で5分ほどの閑静な住宅街に住んだ。ポッテンホルンの住居はおよそ250年前に建てられた建物であったが、いまでは休暇用住宅として現代風に改修されていて、なかなかの住み心地であった。その隣にパン焼き小屋があった。これは1776年——不思議なもので、この年に出会うと、いわば本能的にアダム＝スミスの『国富論』とアメリカ独立宣言を思ってしまうのだが——に築造されたもので、すでにかなり古びていて、2階に上がると壁は崩れ天井も半ば落ちかかっていたけれど、村の何軒かの農家は今でもこの釜を使ってパンを焼いているとのことであった。200年以上も前のパン焼き小屋ともなれば、日本ならちょっとした文化財で、市や県あたりから特別に指定を受けているところなのかもしれない。もしそうでもしなければ、現在の日本の社会では生活に根ざした文化は常に根絶やしにされる危険に曝されているからであろう。

マールブルクのアパートはおよそ100年前の建物で、家主のカップ

ートお婆さんは第二次世界大戦で夫を亡くしていた。彼女が何よりも自慢としているのは、世界の各地からマールブルク大学にやってくる学者たちをこのアパートの住人に迎えてきたことである。彼女が大切にしている小さなノートには、かつてI. イリイチもここで生活していたことが記されていた。日本人学者も多く、グリム童話などの研究者として知られている小沢俊夫教授もかなり長期にわたってこのアパートで暮らしたことがあり、彼の弟で指揮者の小沢征爾氏も演奏旅行のおりにここを訪れたらしく、彼女は——そして彼女の妹で同じく戦争未亡人のカウツお婆さんも——その時のことを繰り返しなつかしそうに話してくれた。

3.

ドイツで暮らしたり、あるいは少し時間をかけてドイツを旅行したことがある者は誰もが一度は不便を感じたはずだけれど、商店の開店・閉店時間があまりにも厳格なのである。1992年のEC統合を控え、そして何よりも情報化が急激に進んでいて24時間フルに人間が活動する時代になってきたのに、ドイツ人はかたくなまでに厳格に決められた閉店時間を守る。手元のある資料によれば、ヨーロッパのなかでもフランス、スペイン、スウェーデンには閉店時間に関する法的規制がまったくない。イギリスでは夜8時までと一応法律で決まってはいるけれど、誰もがそれを本気になって守ろうとしないし、当局もまた違反に対し見て見ぬふりをするか、せいぜい少額の罰金でお茶をにごしている。イタリアはやはり8時までだが、地域により10時まで営業できる。こうした国々に対しドイツでは平日だと6時半になると全国いっせいに商店が閉まってしまう。土曜日は1時まで。日曜日は終日閉店。開いているのはレストラン、コーヒーショップ、アイスショップくらいのものである。だから日本と違って、ドイツでは土曜日の午後からは街の人通りはめっきりと少なくなり、観光地と名のつく所なら日本人などの観光客ばかりが歩いている、といった具合なのである。

なぜ閉店時間にこれほど厳格なのか、少しくらいはお客さんのことも考えて欲しい、と我々日本人はつい愚痴のひとつも言いたくなる。そしてそれほどカッキリと、しかもいっせいに閉店するのであれば、日本のように自動販売機のひとつも置いてくれたらと思う。

世界最初の自動販売機は紀元前215年、エジプトで発明された聖水の自動販売機で、コインを投入すると水が出てくる仕組みになっていた。日本で最初の自動販売機は明治27年に俵谷高七によって発明された切手と葉書の自販機で、その後も入場券自動販売機、菓子、切手、タバコなどの自動販売機が発明されているが、この便利な機械が国民生活のなかに着実に入って来るのは、やはり日本が高度成長に突入してからである。

昭和34年ごろから駅や街頭に切符、たばこ、菓子の自動販売機が現れはじめ、噴水型ジュース自販機が登場するのは昭和36年であり、38年にははやくも缶ビールの自販機販売が始まっている。自動販売機のこうした普及は、なによりも高度成長とともに生じた人手不足に帰せしめるべきであるけれど、少額貨幣が紙幣からコインに移っていったことも、普及を促進する重要な要素であった。

現在では、全国いたるところ、ところかまわず、さまざまな自動販売機が設置され、それのない生活はもはや考えられなくなっている。自動販売機のなかでも特に問題なのは先進国では日本にしかない酒類の自販機で、これは、「ヤングドランカー」の増加が深刻な社会問題化しているにもかかわらず、何の規制もないために依然として増え続けていて、平成2年末現在、全国で19万5千台も設置されている。その日本に比べると、ドイツでは所々に建っている自販機といえば、いまだにタバコのそれくらいなもので、世界で最もビールを愛飲するこの国で、私は缶ビールの自販機を見たことがない。もちろん缶ビールや缶ジュースの類が売られていないのではない。スーパーマーケットに行けば、いつでも、いくらでも買える。しかし自販機では買えないのである。

この閉店時間の厳格さとタバコ以外に自販機をめったに見かけないことは、1976～77年にかけてドイツに留学していた頃と少しも変わっていない。この13年間の、日本の庶民生活の変容振り、とりわけやたらに目につくようになった自販機と日本に氾濫している空きカンを思い浮かべるにつけ、あらためてドイツ人の保守性、頑固さには驚かされる。ただ彼らの発想からすれば、6時半にいったん店を閉めておきながら自販機で商売を続けるというのは、実質的な営業時間の延長になり、それは本来際限のない欲望に屈した一種のルール違反なのかも知れない。

4.

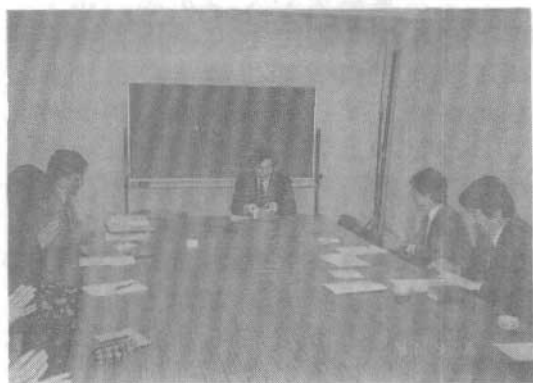
欲望に身を任せ、守るべき規範から外れた行動をすれば、一体どのような結果になるのか。私はここでグリム童話をいくつか思い出す。たとえば「白雪姫」。白雪姫が継母に追われて森で七人の小人と暮らしている。小人たちが仕事に出かける前に、白雪姫に継母にはくれぐれも用心するようにと注意したにもかかわらず、継母が小間物売りに変装して白雪姫のもとに姿を見せ、「どれも上等、どれもきれいな」絹の紐を見せると、白雪姫はそれがとても欲しくなり、小人の忠告を忘れて継母を家に入れ、危うく殺されかける。二度目は毒の櫛。そして三度目は「だれだって食べたくなる」赤いりんごであった。この時も白雪姫は、百姓の女に変装した継母が差し出すりんごがとても赤くて美しく、それに美味しそうに見えたので、どうしても我慢ができなくなり、ついに手を延ばしてそれを取り、口に入れた途端に倒れて死

んでしまう。三度とも白雪姫は小人たちから継母の悪巧みには十分に気を付けるように忠告されていたのに、見た目には美しかったり、美味しそうなものには簡単に誘惑されてしまい、そしてその誘惑に負けたことへの報いとして死の罰を受ける。もちろん、この童話では、最後に秩序の回復をシンボライズするひとりの王子が現れて彼女は救われるけれど。

「赤ずきん」の話も同じように読むことができる。赤ずきんはある日、母から病気のおばあさんのもとにケーキとワインを届けるように頼まれる。赤ずきんは道草をしないようにと母から注意されていたのに、森で狼に出会い、きれいな花が咲き、小鳥がかわいらしくさえずり、「森の中ってのは、じつにどうも、おもしろいところなのに」、「学校に出かけるみたいに、まっすぐ行くだけなんぞ、つまらねえ」と誘惑の声をかけられると、母の忠告はすっかり忘れ、道からそれて森に分け入ってゆく。そして花をつみはじめる、「きれいな花に目うつりがして、どんどん奥へ入り」こんで行った。ここでも、美しい花の誘惑、いわゆる「快樂原則」(ベッテルハイム)に負けた赤ずきんは、後になって、狼に食べられるという罰を受ける。

5.

グリム童話はいろいろな読み方が可能であるし、これまでもさまざまに解釈されてきたけれど、人間が際限なき欲望にすっかり身を委ね、ひたすら快樂を求め続けるならば、その先に何が待ち受けているのかを、我々現代人に伝えているのではないだろうか。ドイツ人がこのグリム童話のメッセージを自然に体得しているのかどうか、もちろん私にはわからない。けれども、融通むげに便利そうなものは何かから何まで作りだし、それを金さえあれば誰でもいくらでも手に入れることができる日本、いわば国をあげて「快樂原則」に夢中になっている日と



谷本教授発表

比べるとき、たとえ不便ではあっても、閉店時間を厳格に守り、むやみに自動販売機を設置していないドイツをどのように考えたらよいのだろうか。

そういえば、フランクフルトからケルンに向かう列車である老婦人と乗り合わせたことがあったが、彼女が窓外を並行して流れるライン川を見やりながら、快適な生活を追い求めるばかりで、かけがえのない自然や生活環境を破壊してゆけばどうなるだろう。子供や孫たちの世代に対しそれは余りに申し訳ないことだと、しみじみと語ったことが思い出される。



質疑応答

3. 研究会記録

- 第1回 1989.5.12(金) 研究員全員
「人間の深層心理と社会の深層構造」研究会発足
- 第2回 1989.6.9(金) 谷口 文章(甲南大学 文学部 助教授)
「実体論をめぐる合理性と非合理性の諸問題
～人間の深層心理と社会の深層構造～」
- 第3回 1989.7.7(金) 永友 育雄(甲南大学 経済学部 教授)
「経済学における非合理的要因について
～一般均衡学説を中心に(試論)～」
- 第4回 1989.9.29(金) 谷本 泰三(甲南大学 文学部 教授)
「ハーマン・メルヴィルにおける反合理性」
- 第5回 1989.10.27(金) 杉林 稔
(関西青少年サナトリウム 精神科医)
「異文化とのコミュニケーション～一分裂病患者を通して～」
- 第6回 1989.11.16(木) 小谷 英子(大阪大学 環境医学教室)
「人間学的精神療法における人間観と世界観
～V.E.フランクルのロゴセラピーをめぐる～」
- 第7回 1989.12.19(火) 寺島 樵一(甲南大学 文学部 教授)
「面影・イメージ」
- 第8回 1990.1.13(土) 中川 米造(大阪大学 医学部 名誉教授)
第6回公開講座「医療の神話」
- 第9回 1990.2.15(木) 藤本 建夫(甲南大学 経済学部 教授)
「ビューリタニズム・原始仏教・新新宗教」
- 第10回 1990.4.13(金) 小出 龍太郎(浪速短期大学 講師)
「モーパッサン、その心の星座」
- 第11回 1990.5.17(木) 佐藤 明雄(甲南大学 文学部 教授)
「宗教と科学の間」

- 第12回 1990.6.26(火) 森 茂起(甲南大学 文学部 講師)
「深層心理学と家族面談の在り方～あるケースを通じて～」
- 第13回 1990.9.25(火) 織田 尚生(甲南大学 文学部 教授)
「昔話と夢にあらわれた結婚のテーマ」
- 第14回 1990.10.30(火) 谷口 文章
「宗教と催眠」
- 第15回 1990.11.20(火) 永友 育雄
「経済学における合理性と非合理性
～シュンペーター学説を中心に～(試論)」
- 第16回 1990.12.18(火) 谷本 泰三
「Nathaniel Hawthorneの悪魔像をめぐる」
- 第17回 1991.1.22(火) 藤本 建夫
「『ああ上野駅』～メディアが生み出す『東京イズム』～」
- 第18回 1991.3.14(木) 寺島 樵一
「日本古典詩歌の修辭的問題～表現の深層～」
- 第19回 1991.4.6(土) 谷本 泰三
「ハーマン・メルヴィルの川～地図にある場所、地図にない場所～」

VI

龜岡生涯學習市民大學

平成2年度 亀岡生涯学習市民大学 開講にあたって

今日、人々が急激に変化する社会を豊かに生きるためには、生涯にわたって自己の充実や生活の向上のため学び続ける、いわゆる生涯学習が必要とされています。

そして、それぞれが、その個性を発揮して自らを生かすとともに、お互いに助け合い学び合う地域社会をきずかなければなりません。

明治以来、時を告げてきたのは学校であり、銀行でありました。それらは時代の情報発信基地であり、社会の中心であったと思います。

生涯学習社会の到来とともに、市民の館である市庁舎塔のカリヨンベルが時を告げる時代がきたのではないのでしょうか。

生涯学習市民大学が、ここ市民ホールで開催できます喜びを第2期生の皆さんとともにわかちあい、“きょうより あしたのわたしへ”をめざし、カリヨンの鐘の響きとともに、生涯学習の輪がさらに丹波路に広がることを願っています。

平成2年10月

亀岡市長 谷口義久

★ 開設趣旨 ★

急激な社会の変化の中で、人はあふれる物の豊かさから、生きがいとゆとり、心の豊かさを求める傾向にあります。

"緑と心のふれあう活力にみちた住みよいまち・亀岡"をめざして、現代社会を正しく見つめ、より豊かな情操と教養を身につけ、21世紀を切り開く知恵を持つことが望まれます。

亀岡生涯学習市民大学は、古代史の権威・京都大学教授の上田正昭先生を学長に生涯学習の場として、各界で活躍中の学者・文化人・専門家等を招き、広く亀岡市民の文化の振興・向上・創造等に資する講座をシリーズで組んだものです。みずみずしい知識と高い文化を呼吸するまたとない機会です。

- ☆ 主催 亀岡市・亀岡市教育委員会
亀岡市生涯学習都市推進会議
- ☆ 事務局 亀岡市教育委員会 社会教育課
(亀岡市安町野々神8番地 電話2-3131 内線2732)
- ☆ 会場 亀岡市役所市民ホール
- ☆ 期間 平成2年10月6日(土)～平成3年2月16日(土)

(「1990年 亀岡生涯学習市民大学 講義要項」より転載)

「心豊かに感じ、考え、行動すること」

甲南大学 助教授 谷口 文章



谷口 文章 氏

略 歴

1946年 兵庫県生まれ
大阪大学大学院博士課程退学（西洋哲学史、倫理学専攻）
国立奈良高等専門学校講師
甲南大学文学部講師
現在 甲南大学文学部助教授（哲学）
日本イギリス哲学会、日本18世紀学会、
日本箱庭療法学会、日本環境教育学会
他所属

著 書

著訳書

共著「現代思想のトポロジー」 （法律文化社）
共著「西洋哲学基本辞典」 （富士書房）
共訳 エイヴンス
「リアリティとしての想像界
—ユング、ヒルマン、バーフィールド&カッシーラー—」
（創元社）

論 文

「アダム・スミスの共感について」 （大阪大学文学会）
「功績・罪過の感覚の原理について」 （日本イギリス哲学会）
「円形脱毛症の箱庭療法過程
—時間的制約下での催眠療法の併用—」 （日本箱庭療法学会）
他多数

亀岡生涯学習市民大学カリキュラム

平成元年度

10月6日(金)	山本書店主 山本 七平	心学・石田梅岩
11月6日(月)	京都大学教授 上田 正昭	古代の日本と 丹波の再発見
12月9日(土)	大阪樟蔭女子大学教授 名倉 啓太郎	子どもの 健やかな育ちと社会
1月13日(土)	総合人間研究所所長 早川 一光	「お年寄りの心とからだ」 ボケない方法教えます
1月20日(土)	ピアニスト 樋上 由紀	「ピアノの演奏とお話」 音楽の魅力
2月10日(土)	京都大学教授 米山 俊直	小宇宙論・亀岡

平成二年度

10月6日(土)	エッセイスト 岡部 伊都子	人権のゆくえ
10月13日(土)	京都大学教授・市民大学学長 上田 正昭	卑弥呼とその時代
11月10日(土)	作家 中島 道子	今よみがえる明智 光秀とその妻熙子
12月15日(土)	甲南大学助教授 谷口 文章	心豊かに感じ、考え、 行動すること
1月26日(土)	ヴァイオリニスト ジェラルド・ジャーヴィス ピアニスト 樋上 由紀	ベートーヴェンの 世界
2月16日(土)	京都教育大学学長 蜂須賀 弘久	南極に生きる

目 次

はじめに	144
一、心の豊かさ	144
① 亀岡の風土	144
② 生きられる時間・空間 —濃淡のある世界—	145
③ 哲学とは —実体論、関係論、そして行動—	147
(i) 伝統的哲学とは	
(ii) 実体論的二元論	
(iii) 実体論の相対化	
(iv) 相対的関係論	
(v) 相対的関係論を超えて	
二、感じ、考えること	150
① 多様な認識の仕方	150
② 認識の拡張	153
(i) 射影幾何学	
(ii) 位相幾何学	
(iii) エッシャーの絵	
(iv) ダリの絵	
③ 言葉の問題 —遊びと創造性—	159
④ 見えることと見えないこと	161
(i) 内と外をめぐる問題	
(ii) 意識と無意識	
三、「感じ、考える基盤」としての環境	162
① 内なる環境 —精神病理の問題(箱庭療法)—	162
② 外なる環境 —環境・社会病理の問題—	165
(i) 危険な食べ物	
(ii) 奇形ザル問題	
(iii) 研究室からの報告	
③ 発想の転換 —人間本性の課題—	170
四、行動すること	171
① 科学の立場 —事実の問題—	171
② 哲学の立場 —価値の問題—	173
五、心豊かに感じ、考え、行動すること	174
① 地域主義 —等身大の思想—	174
② 環境教育と子どもたち —心の環境の大切さ—	175
③ 小さな幸せと平凡さ —宗教心—	176
〈付記〉	

はじめに

ただいま、ご紹介にあずかりました甲南大学の谷口と申します。

これから、講義形式でお話しくと思いますが、実は、私は亀岡に移りまして十五年間、篠町第三見晴に住んでおります。今日は、「心豊かに感じ、考え、行動すること 一内と外の環境をめぐって一」というお話になるかと思えます。私の専門は哲学ですけれども、倫理学あるいは心理学、そしてまた環境問題などに興味がございます。二十一世紀に向けて、新たに私たちがどのように生きていくべきかを、いろいろな分野から考える必要があるのではないかと常々思っております。そのためには、やはり環境ということがいま差し迫った問題になると考えております。

少し哲学の内容も入りますので、多少むずかしいことがあるかとも思えます。そういう意味でも、また内容的にも少しショッキングなお話になるかと思えますので、中ごろに、この市民大学講座としては異例ですけれども、十分間ほど休憩をとらしていただきたく思います。ただ、ちょうど五十分で終わるかどうかわかりません。話の切りのいいところで休憩したいと思います。

一、心の豊かさ

① 亀岡の風土

先ほども申しましたように、十五年前にこの亀岡市に住むことになったのですが、まず感動したことは、この自然の美しさ、たとえば春でしたらツクシ、タンポポ、そしてレンゲ畑がある。初夏になりますとカワセミが飛んでくる。私はちょうど鶴ノ川沿いに住んでおります。後ろの川にカワセミが飛んできたとき、非常に感動いたしました。またホタルが出ます。もともと阪神間の人間ですので、まさかホタルが自分の住んでいるすぐ裏の川に出るとは思ってもなかったわけです。また夏になりますと、魚釣りがすぐできる。移ってきたころ、あのころは大学院の学生でしたものですから、魚釣りが珍しくて、毎日毎日釣りばかりしていたら、近所の方々に、よほど谷口さんは暇なんだと言われたことがありました。(笑い)秋になると、やはり稲穂です。散歩のとき非常に豊かな黄金色に輝く稲穂を見ると、本当に忙しい合間でもホッといたします。いまはもう終わろうとしていますけれども、柿の木が次第に色づく頃、青くすばらしい空、空気の澄んだ空、亀岡の空、そこに映える柿の木、そういうものが日々感じ取られる。こうして心の余裕というものを改めてこの風土から得ているわけでございます。ただ、亀岡も冬は非常に寒くて厳しいですね。北海道に自然が残っているというのは、あの寒さ、厳しさがあってこそ、生命力が再び活性化していくのです。やはり、いいことばかりではなくて、多少の忍耐とか辛抱というものを経たのち、豊かなもの、豊饒なるものが得られるのではないかと、そして亀岡の風土にも同じものが

あるのではないかと思えてならないのです。

それで少し、いきなりですけれども、ビデオを見ていただきましょう。どういう状況が亀岡の風土なのかをちょっとご覧下さい。この背後に流れている曲は亀岡市歌で、それから最後の方の背後に流れる曲は亀岡ふるさと讃歌です。これは甲南大学の学生諸君が編曲してくれました。どうぞお聞きください。(亀岡市歌を背景に、保津峡、保津川下り、鶯ノ川、白サギの飛翔する風景がVTRに映る)[写真1. 参照]

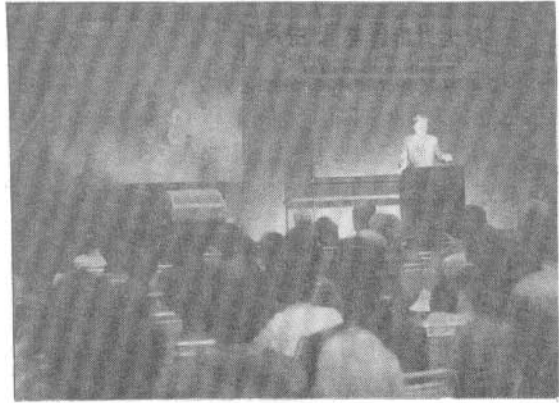


写真1. VTRによるカワセミの紹介

これは、カワセミです。鶯ノ川に、私の住んでいるすぐ裏側の川に飛んで来ました。近所の木村さんという方に撮っていただきました。初夏と初秋にはこのようなカワセミが飛んでまいます。また、この川には、六月にホタルが乱舞します。

亀岡の風土をVTRで少しご覧になっていただきました。私事で恐縮ですが、よく三月が非常に忙しくて、必死になっていると、この亀岡の風土を忘れてしまう。そういうときがございます。そのようなときに、二歳になる近所の女の子が花を持ってきてくれました。そして「おじちゃん、きれいねえ、お花がきれいねえ」と私に言ったんですね。タンポポの花だったのですけれども。そのときにフッと自分は、一生懸命に一体何をやっているのだろうか。何か自分が一生懸命求めているものは、勉強の上で、本の上でやっているにすぎないのであって、現実の世界から遊離していたことに気づかされたこともございました。皆様もやはり亀岡に住んでおられるわけですから、そのような亀岡の風土を、お互いに少し再確認して、次に、生きられる時間と空間についてのお話を申し上げたいと思います。

② 生きられる時間・空間 —濃淡のある世界—

自然に根づいた時間・空間というのは、実は生きている時間・空間ではないか、そう思います。私たちは、日常忙しくしております。社会に出ます。そうしますと、社会体制の中に組み込まれますので時間に追われるわけです。そうすると、自分自身がやりたいこともできない。やろうと思ってもそれを抑えたままで結局行動せざるを得ない。そのような事態が起こってくるわけです。少し言葉はむずかしいですが、そういう体制の中にある時間というのを「クロノスの時間」と言います。(黑板に) こういう直線的で、しかも少しも私たちの実感がこもらないような無機的な時間です。ところが、有機的な風土に育ま

れた時間というのは、私たち個人個人が別個の時間をもっているわけで、このクロノス的な時間を構成する一点一点を結びつけるように、永遠の時間の中に触れている。これを円環的な「カイロスの時間」、そう申します。ですから、私たちが生きている時間は、実は、カイロスの時間なのですけれども、どうも現代の日常意識のところでは、クロノス的な時間の次元で話が進み、私たち自身が、その体制的な時間に合わせながら生きている、そう感じます。要するに、カイロスの時間というのは一瞬における歓喜や永遠性に触れるということ、お祭りなどがその具体例であるわけです。そういう祭りや儀式、非常に大事な時間、そのようなところで人間は生命に触れ支えられているのです。そして、クロノス的な時間、実はそれは物理的な時間であり、時計で計った時間なのです。たとえば受験勉強なんかの場合も、ある直線的目標があって、それを相対的に偏差値をもってどちらが優位であるかと判断しますね。けれども、人間というのは、実はカイロスの時間の中にあるということ。このことを忘れている場合が多いのではないかと思います。

たとえば、一秒と一時間との違いを考えてみましょう。常識的に考えますと、一秒の方が小なり一時間（一秒<一時間）と考える。これが物理的な時間概念です。ところが、私たちが楽しいときの時間、たとえばデートしているときの一時間と、泥棒に入られて金を出せと言われる怖ろしい一秒間、どちらの方が長いでしょうか。それはやはり楽しいときの一時間よりも、苦しい一秒間の方が長くなる（苦しい一秒>楽しい一時間）わけです。これが生きられる時間であるということになります。

だけれども多くの場合は、社会的時間である計測できるクロノスの時間に従って、数量で表わされた方が真実であると考え、非常に無機的で心の豊かさのない世界の中に生活を営んでいる。ところが実は、私たちは質的な生きた時間にいるのです。個人個人にとって、たとえば学校の数学の授業で、数学が得意な人にとっては非常に短い一時間であるけれども、苦手な人にとっては非常に長い一時間である、そのような生きられるカイロスの時間にいるのです。

同じことは、空間においてもそうであるのです。たとえば、教室の中にいて、そして自分が一番前列の中央に座る、そのように決めている学生の人がいるとします。その人は、ほぼ一年間通じてそこに座るのが自分の空間であるわけです。ところが、それがたまたまそこに来て、自分の席にほかの人が座っているのを発見した場合に、ムッとします。その空間というのは生きられている空間ですから、ただ物理的に動かしてしまったりいいというような空間ではないわけです。ですから、生きられる時間・空間とは実は濃淡があるということ。このことを一つ知っておいていただきたいと思います。

したがって、現実の私たちが社会において生きていく場合に、自分

の地位とか、富とか、名誉とかというようなもの、つまり固定した社会的な価値基準、表にあらわれた形式化した無機的な価値基準でもって進んでいるのですけれども、やはりフッと息切れがする。気持ちの上であくせくしてしまって焦りが生じてくる場合に、やはり心の豊かさを求めざるを得ないのではなかろうか、そう思います。その意味では、あとでいろいろな方向から心の豊かさというものを考えてみたいと思います。このような生きられる時間・空間こそ風土、心のふるさとであること。このことを指摘しておきたいです。

③ 哲学とは 一実体論、関係論、そして行動一

(i) 伝統的哲学とは

それから、哲学が一応私の専門になっておりますので、ややむずかしくなりますが、哲学とは何かということのを少し申し上げておきたいです。哲学は、存在、認識、価値を研究します。むずかしい言葉ですけれども、今日問題としたいのは、存在論の中の実体論と価値論の中の相対価値が、実は日常生活の中においてよいにしろ悪いにしろ生きているということと、その問題点についてです。

まず実体論について述べますと、この根源をたどっていくと、デカルトにつきあたる。彼は真なるものを求めてあらゆるものを疑っていく。真なるものを求めて、あらゆるものを疑って疑って、偽なるものを排除していく。このような「方法的懐疑」によって、疑い切れないものを見出していくわけです。そのようにして疑っている自分の意識というものは疑い得ないということ、有名な「コギト・エルゴ・スム（われ考える、ゆえにわれあり）」を見出し、われの存在、これが疑い得ないものなのだということを見出すのです。このコギトの発見というのは、「近代自我の発見」とも言われます。近代自我とは、要するに、生まれてから現在まで引き続き自分という同一の実体が存在し、それが考え方の基準になる。自分というものが出発点となる。そのような思想なのです。この近代自我の発見は、厳密な学問とか、人間の思考法において非常に画期的な事柄であったのですが、それは他方で、心や精神と身体や物体を実体として分けてしまうことになる。そして心や精神が優位であって身体や物体は劣位にある。そのような形の「二元論」に陥っていきます。われは発見する精神主体であるわけですから、「われ」が一番真実だ。身体というのは、対象であり、物体であるため、劣位にある。ですから、この心や精神は合理的な理性という意味で、人間が優位にあるという考え方になる。それに対して、劣位の身体とか物体とかは、すべて人間が支配してもいいわけです。そういう発想では、機械的に物事を把握しようとするようになります。人間以外のすべてのものは機械ですから、たとえば自然は、人間のために利用してもよろしいということになります。すなわち、人間が優位で、自然というものは劣位で生命のないものであり、自然を支配するという姿勢になる。伝統的哲学の発想がデカルトのこのような

「コギト・エルゴ・スム（われ考える、ゆえにわれあり）」から派生してきたのです。

(ii) 実体論的二元論

自然は命なきものであるとするから、科学が無制限に発達する。あるいは科学主義に根ざした物質文明というものの発達が可能になってきたわけです。さらに、人間がすべてのものに優位であるということですから、他の命、動物の命は劣位にあるという考えにまで行きつきます。そうしますと、科学文明の発達といった場合に、人間を中心とした利益追求が人生観の原理となっていく。そこで、個人の利益＝個人の幸福、そして私企業の利益＝社会の幸福という形になっていくのですから、その考えの下では相対比較してむだなものは省略する。むだなものは切り捨てる、むだなものは排除するという形になっていかざるを得ないのです。そこから公害とか環境問題というの、実は連なってくるわけです。これらにつきましても、のちほど詳しくお話をしたいと思いますが、この人間中心主義という考えを発想として逆転させていかなければならないのではないかと、そのように私は考えます。

先ほど述べましたデカルトのコギトに影響された伝統的哲学は、科学的思考と軌を一にして真と偽とか、善なるものと悪なるものとを明確に分ける。あるいは正なるものと間違っているものを分ける。そのような二元論になっていきます。たとえば、正常、それに対して異常というような区別。そういう発想が出てきて、一方のほうが正しいと考えるわけです。あらゆることにおいて、一方のほうが正しくて優位であって、そして他方のほうが間違っていて劣位にある。そのように考えていく発想が出てきます。この優位にあるものは、変化せず、動かない、普遍性を持っていると考える。これを哲学上「実体論」と申します。すべてを実体化しながら、それを普遍的基準としていくわけです。だから成績がよければそれで正しいという考え方、その子が幾ら優しい心を持っていても、成績に反映しなければ全部切り落とされていく。このような教育が現にあると思います。そういうところでは、この実体的な思考方法が正しい基準とされ、子どもたちの心は潤いを失い、「すべてかゼロか (all or nothing)」という二進数的発想になると考えられます。このような実体的二元論の思考方法は現代においてあらゆるところに機能しているのではないかと思います。

(iii) 実体論の相対化

ある事柄が唯一正しいとする実体論をある意味で相対化する必要があります。実体的にものごとを考える習慣を相対化する。たとえば、障害者の週間がありましたけれども、そのことを考える場合、通常の健常者が優位であり、そして障害者が劣位であるという発想を本質的に転換しなければならないと思います。つまり、障害をもっていることは不利な状況であると考えのではなく、それは個性であるとも考

えられるわけです。一週間ほど前、NHKの午前中のテレビで、Kさんという方でしたか、足で絵を描かれるわけです。足で料理をなさる。自分で自立しておられる。そのような場合。あるいはもう一人もっと重度の方がおられました。普通に歩くことすらできない。けれども、彼女も絵を描く。Kさんは非常に緻密な絵を描かれるのですけれども、もう一人の方は、実は一筆一筆に生命を込めている。その絵の線は、ものすごく太いのです。それで仏像が描かれるのです。出来上がった絵、それはもう大変迫力があるもので、個性としてあらわれている。むしろその一筆一筆の中に命がこもっている。こう考えれば、正常・異常というような区別ではなくて、やはりこれは個性として考えていく必要があると思います。このように実体論という考え方を相対化していく。どちらが正しいという問題ではないというように相対化していく考え方が必要になってきます。

(iv) 相対的關係論

それを現代哲学の分野、言語学の分野でやったのがソシュールの言語学です。言語で規定されたものを、これが唯一正しいと言うのではなくて、そのような言葉による認識は相対化されたところにうまく成立しているのであって、決してそこで唯一の正しいものがあるのではないという考え方です。そうすると、相対的に「関係の網の目」を形成する言語というものが、実は、対象の存在、あるいは物事の存在を喚起する力としてある。その言語によって「名づける」ということにおいて、たとえばここに机があると認識できる。これを机と名づけなければ、一応机らしきものはあるけれども、机としては存在しないわけです。その意味において、言語こそ存在喚起力を持つ、そうソシュールは言います。それとともに、たとえ存在したとしてもそれは相対的なものにすぎない。実は「関係性」にすぎない。そのようにも言います。この関係性という言い方はむずかしいですから、のちほど詳しく申し上げるつもりです。たとえば実体的同一性ということを考えてみましょう。私がいるという場合、あるいは皆さんがおられるという場合、普遍的に変化しないかのようなのです。皆さんが現在と十年前と比べてみた場合に、同じ人ですかと聞かれたら、きっと違うと思うのです。自分というのと同じで変わらないというように実体化していたら、固定化します。けれどもそうではなくて、十年前の自分と現在の自分は違うのです。たとえば、体の細胞も含めて、人間は三年ですべて新しく入れかわってしまう。そうすると、人間は実体として普遍的なものではなくて、同一性とは自分自身があるという自己意識の同一的關係なのです。つまり、自分が今あるというのは、デカルトや伝統哲学のように実体的同一性にもとづくのではなく、関係的同一性にもとづくということです。そのような「相対的關係論」をソシュールは提唱し、それによって実体論を批判します。絶対唯一の実体化された真理を相対化していくと、絶対の真理は存在しない。唯一の価

値基準というものはない。実体という固定化したものはないことになる。そうすると、何が残るかということ、実は言語の性質から生じた相対価値の関係論にいきづくわけです。

(v) 相対的關係論を超えて

ちょっとむずかしいお話を申し上げましたけれども、繰り返し言っ
てまいります。哲学とは何かと問う場合、現在の一番の哲学のトピッ
クスというのか、現代哲学の考え方、それには、言語の問題があるこ
とがおわかりになっていただけたかと思えます。

しかしながら、このソシュールの相対的關係論であっても、価値論
にあてはめると、相対主義であるために、人は心豊かに生きていくこ
とができません。なぜならば、相対的に常に他人と競争していかねば
ならないからです。そこで私たちは、先ほど申しましたように、生き
られる時間・空間つまり生きた場面ということから考えたいのです。
けれども、まだまだこれでは理屈の上にすぎない。さらにこのような
相対的価値論を超えるためには、私たちは現実に「行動」しなければ
ならない。生きた場面は、行動を伴っているのですから。しかもその行
動というのは、絶対的なもの、聖なるもの、宗教的なものに根づいて
いる行動ではなかろうか、そう思います。

哲学は、よく百人哲学者がいたら百通りの考え方があると言われま
す。それは非常に特殊な学問なのです。ところが特殊というものを徹
底すれば普遍につながっていくとも考えられるわけです。この意味で
哲学は普遍に根ざしているのです。

二、感じ、考えること

① 多様な認識の仕方

今から皆さんに具体的に体験していただきますが、哲学とは何かと
いう場合に、今まで述べてきましたように哲学とかあらゆる学問、こ
れが絶対正しいと言っても、実はそうではないものも起こり得るとい
うことを一つ覚えておいていただきたいのです。

それから、言語によって存在が現象したり、文明や文化が形成され
たりしていますが、それは言語の相対的性質によってそういう事柄が
起こっている。しかも理論的には、相対的關係論のところまで行くの
ですけれども、その次の段階では、私たちは生きた時間・空間という
濃淡のある世界に住んでいるわけですから、現実には主体的に感じ、
考えて行動しなければならないということが要求されます。だからせ
いぜい現実に対して学問のできるところは、方向づけにすぎないの
です。そういうことを少し申し上げて、次の認識論の前提としたいと思
います。

皆さんの持っておられるレジュメ、あるいは何か紙がございましたら
それを裏返しにしてください。私は、授業中いつもこのように（講
演台から下りながら）皆さんのところにどのようにお考えですかとお

話しに行ったりします。[写真2. 参照](会場で)そこにコップを描いてみてください。どのような位置でも、どのような大きさでも結構ですから、コップを描いてみてください。大体描けましたでしょうか。いかがですか。それでは、(ある学生に向かって)ちょっとお預かりできますか。お名前を書いていただけますか。(別の学生に向かって)お名前をちょっとここに書いておいてください。しばらくお預かりいたします。

先ほど言葉の問題という形で申しましたけれども、さらに言語の論理性だけではなくて、認識の最初を反省してみましよう。同じコップという言葉では、皆さんが認識される場合、同じ物があらわれてこなければならぬはずなんですね。ところがこのS Iさんの場合、また大抵の方がこのように描かれたのではないかと思えます。ちょうど真ん中のところに大きくコップが立体的に描いてありますね。ところが、同じように描いていた



写真2. 会場での講義風景

だいても、MAさんの場合に、紙面の端にちょこっと描いておられます。MAさんの性格を見ますとかなり内向的であるということがわかりますね。(笑い)このように、私たちは言葉でもって同じものを把握しているかのようなのですが、かなり把握の仕方が違うのです。ですから、ここのところで言葉による意志疎通を正確にするためにはどのようにしたらいいのかを考えなければならない。MIさんの場合に、このように描いていただいています、線に注意していただきたいのです。コップの絵を描くために何回か線をなぞっておられます。いろいろ解説いたしますが、このように分析することで私が診断して性格を決めつけるとか、そんなつもりはさらさらありませんので。ただ、この線から推測するとMIさんの場合に、これでもかこれでもかという徹底する性格があるかもわかりませんね。あるいは完全主義者、そういうところがあるのかもわかりません。(笑い)そして、皆さんが描かれた場合はどうでしょう。残念ながら、ほとんどの方は遠近法の形で描いておられるのではないかと思えます。実はそれぞれ個性がおありにもかかわらず、私たちの受けてきた教育が一方的に、こういう遠近法が正しいですよと固定化して教えられてきたことを示している。その固定化したものにとらわれてしまっている。その辺りに、個性をおおい隠している、実体性という言葉の問題があるわけなのです。それでは、ビデオを見てください。次のようなコップの例がありま

すので。これは、大学生が描いたものですがけれども、皆さんと同様に普通はこのような立体的なコップの絵が多いのです。性格判断しますと、先ほどおられましたように、極端に左の方に描かれる場合は、内向的な方ですね。（影のある別の絵）やや黒いですから、そのあたりはやや根暗かもわかりませんが、ここのところで“コップジャー”というふうに自己主張しています。（笑い）あるいはこのようにラベルを貼ることによって、意外と権威主義を表しているのかもわからない。キリンレモンと書いてあって、星まで出ているわけですから。この場合、“ジャー”というふうな感じであらわれてきている、そういう自己表現のコップです。（笑い）〔図1-①参照〕

図1. 多数の視点と精神状況

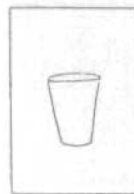


図1-①遠近法によるコップ



図1-②横断面から見たコップ



図1-③恐迫神経症のコップ



図1-④内的環境を表すコップ

（平面的なコップの絵）ところが、私が欲しかったのは、こういうコップです。きっと皆さんも小さいころに描かれたと思います。あるいは子どもさんたちが描いたかと思います。真上から見たコップ（円形）、真横から見たコップ（長方形）の場合、縦や横から切断した平面的なコップです。ところがお母さんやお父さんから立体的に描いたらきれいに見えるよ、うまく描けるよと教えられた。しかしながら、ある物事があって、行き詰まった場合、発想の転換をしなければならない。そこで、横からや上から見たものの見方、このような発想の転換が必要なわけです。けれども、それではといて、現実の社会において、これがコップだと言って、平面的なコップばかりを描いたらこれはおかしいわけです。社会的な適応ができないのですから。したがって、このような多角的な見方も、それから遠近法的なものをも描けるということが大切です。思考、物の見方の柔軟さが必要になってくるのではなかろうかと思います。〔図1-②参照〕

（繰り返し消された後、描かれたコップ）この場合やや病的です。これは、一度コップを描いて、そして消して、またコップを描いて、さらに消して、最後に上にコップと字で書いています。こういう場合になりますと、強迫神経症ですね。人に見られて評価されるかもしれないからと、完全なコップを描こう描こうとして、そしてこれしかできなかつたというような結果になります。そのような場合、完璧なものを描かねばという分節が非常に厳しい。すなわち、精神的によいものとへたなものを分けるということが厳しい。うまく理想的なもの

を描かねばという実体論的な発想が厳しいわけです。けれども、ある程度緩やかであってもいいのではないか。ルーズであってもいいのではないかと思います。それがなかなかできない、そういうふうな場合があります。[図1-③参照]

(コップの底からガラスの破片が盛り上がっている絵) このコップの場合に、一応正常な形で自我意識を持っているわけですがけれども、こここのところからガラスの破片のような割れた物が盛り上がってきています。この辺のところにも、自分の心の中に何か傷ついているもの、傷つけるものが潜んでいる。そのようなコップです。

もう少し極端になりますと、パーンと割れたコップを描いて、パリンというように書く学生もいます。そうしますと、やはりこういう場合は、ちょっと話をしにいらっしゃいと言ってカウンセリングをする必要があるかもわかりません。(笑い)別の例を挙げましょう。鉛筆なんかを示して、赤鉛筆のイメージは?と言って、教室に座っている一列の人に順に聞いてみます。そうしますと、大抵大学へ入ってからすぐの学生の場合は、受験勉強とか、ガリ勉とか、あるいは極端な場合、その鉛筆の先に目玉が突き刺さっていると、嫌悪感を表わす学生もいます。本当に様々です。以上のことから、同じものの認識の仕方がいかに違うかということがわかります。[図1-④参照]

さて、コップの話をごここまでいたしますと、さて再びもう一度コップを描いてくださいと言われたら、おそらく皆さんはいま、何を言われるかわからないから、真ん中に描いて、同時に平面とか断面図を描こうと思われるかわかりませんが、それはそれで結構です。(笑い)自分の認識の仕方を自覚されたわけですから。たとえ遠近法的な図を描こうが断面図を描かれようとも。それ以上に大事なことは、ここにコップがありましたら、二百五十人のそれぞれの視点から皆さんは見ておられるということです。そうしますと、二百五十倍の見方がいま一挙にできたということなんです。いままでは自分の立場からのみの遠近法的視点でしたけれども、それを一回このように多様に考え、反省してみて、そして別の視点を皆さん自身のものにするならば、一挙に見方が広がっている。これが実は私が言わんとするところの「哲学する」ということなのです。つまり、一つの視点のみが正しいと実体化しない考え方が大切だ、ということです。相対化する具体例を経験していただきました。

② 認識の拡張

(i) 射影幾何学

認識についてももう少し学問的な次元でお話いたしましょう。ビデオをお願いします。

いくつかの図形が現われます。これから「射影幾何学」の考え方を示しましょう。これは正方形です。正方形という同じ対象物でありながらビデオカメラの視点が変わりますと、これは何に見えますか。菱

形ですね。さらに、これは何に見えますか。台形ですね。このような考えかたを、レジュメの方に書いてありますが、むずかしい言葉で射影幾何学と申します。同じものを見ながら、見る視点が違えば違って見えるということ。その辺のところも日常生活における認識の仕方ということで、いろいろ考えてみたいと思います。視点を移動すると同じものが違って見える。これを「射影変換」と言います。繰り返しますと、同じものでありながら視点が変換されると違ったものに見えるということ。これを一つ覚えておいていただきたいと思います。〔図2-①参照〕

今のお話を教育にあてはめてみましょう。私が学生諸君を見る目と、そのご家族の方が子どもさんを見る場合とは、見る目が違うと思います。その辺りのところは視点を多数持っていたりできなかったら、お子さんの全体像がわからない。意外と親御さんが「うちの子はいい子です」という子は、かえって家庭内で感情を抑えているために外では暴れん坊であるということがよくあります。逆に外で非常にいい子の場合は家ではわがままだということがあられるわけですから、その辺は内と外の視点から同時に見ていただかなければなりません。

図2. 種々の変換

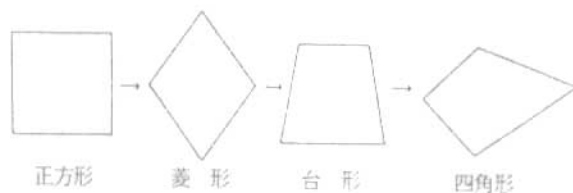


図2-①射影変換（視点が違えば、同じものが違って見える）



図2-②位相変換（「閉鎖線で囲まれている」という定義が同じなら、違うものであっても同じとされる）

(ii) 位相幾何学

それでは、次に「位相幾何学」の場合はどのように映るかということを見てみたいと思います。正方形も、これから現われてくる図形はすべて同じものとして定義づけられます。要するに閉鎖線、閉鎖された線で囲まれているものはすべて同じだという定義づけです。そうしますと、正方形であっても、長方形であっても、四角形であっても、あるいは瓢箪形であっても、楕円形であっても、そして円形であっても、同じものと把握されます。ですから「言葉の定義づけ」によって、私たちの認識の仕方は同じものとなって、同様の論理を学問

においても取り扱うことができるのです。このようなわけですから、射影幾何学的なものとか、それから位相幾何学的なものによって多様な認識が成立していますが、私たちは、これに似たことを実は心の奥底でやっているのです。[図2-②参照]

現実を把握するときに、私たちがいわゆる正常な形で認識している場合と、それからお酒を飲んでいる場合と、さらに夢の中で空を飛んでいる場合など、それぞれ違うわけですが、一律の方法で認識できない流動する心の動きがここに反映している。私たち自身がこれが正しいのだと思うことは、意外と正しくない。これが唯一正しいと言うと、なかなか今度は現実の社会ルールというようなものに当てはまっていないこともあります。神経症の子どもさんたちを見ておきますと、社会的適応がしにくい。というのは、彼らは自分なりの一律のルールや正義感に従って行動しているからです。ある意味で、それはそれでいいんです。その家庭の正義感、家庭のルールで個人は動いているのだけれども、しかし、それがあまり清く正しく美し過ぎるならしんどいことです。そのような場合、現実の社会では意外と適応しにくい子たちなのです。本来、家庭と社会のルールをすり合わせながら、けんかしたり、仲なおりましたりして育っていくものだけれど、けんかもせず、外で遊びまわることないまま自己完結した人となっていく場合に、なかなか他者を受け容れることができない。そのため、はね退けになる。神経症的な症状が起こってくる。心の病の問題が生じる。だから、先ほどちょっとむずかしく関係性の問題と申しましたけれども、この関係的自己同一性を保った自己があるということは、自分と母親との関係が原点になります。そして父親や家庭内の人間関係、友人や教師との人間関係、そのような諸関係から実は自己というものは形成されていることを知っておいていただきたいのです。

そして、あらゆるものが写真で撮ったように客観的対象と主観が一对一として認識され、これが唯一正しいと常識的には考えるのだけれども、たとえ客観的に写真で撮ったものであっても、皆さんが受け取るときには違ったものとして現われてきている。そのことは先ほど申し上げたとおりです。科学的にカメラのように客観的に認識したものは絶対正しいという考え方、これは相対化する必要がある。

人間の心の中で美しいと思うことについては、皆さんも私もみんな共通して美しく感じるわけです。それにもかかわらず、科学的に客観的と考えられることは正しい、他方主観的と考えられることは特殊であるという先入観がある。それに対して少し考えてみますと、客観的なものは一つの答えでしかなく、それを確定しようとするれば、近似的な答えと比較した相対的なものにすぎなくなるのではないか。他方、美的なものに代表されるように、特殊なものを徹底すれば普遍なものを見出せるのではないか。そういうことをもう少し申し述べたいと思います。

(iii) エッシャーの絵

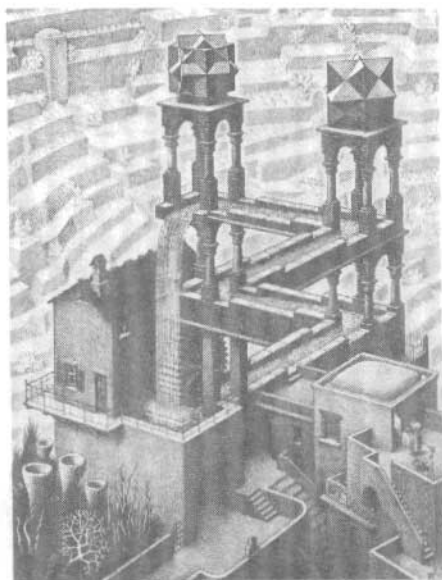
これは、(『悪魔と天使』の反転図形をスライドで映しながら) エッシャーの絵です。(一人の学生に向かって) おそれ入ります。お名前は? Nさん。これは何に見えますか。黒と白のいずれかに注目していただいたらいいのですけれども、何に見えますか。コウモリに見える。(会場全員に) コウモリに見える方、手を挙げてください。コウモリ以外に見える方、手を挙げてください。コウモリ以外。そちらの方お名前は? Tさん。どのように見えますか。スカートをつけた女の人ですか。女の人と見えますが、実は天使なんですね。スカートではないんですね。羽なんですね、これは。天使の羽なんです。よろしいでしょうか。



絵1. エッシャー『悪魔と天使』
(M.C. エッシャー画集、河出書房新社より)

意外と皆さんが、きょうは心が重いなど感じる時には、黒い方の悪魔が見えるかもわからない。きょうは心が軽いと思う、あるいは非常にいい気持ちの場合だったら、天使に見えるかもわからない。あるいはこういうように暗い場合(スライドを映している会場)でしたら、やはり何か暗いところに目が行きやすいでしょう。皆さんがもしこれをコウモリ、悪魔と見る場合でしたら、これは内面を投映して見ているとも考えられます。

天使を見ているとき、あるいは悪魔を見ているとき、そのときには見えている主題以外を切断して、ほかのものは見えなくしているわけです。これを心理学的に申しますと、認知しているところは「図」として浮かび上がって、背後のものは全部「地」として退いてしまっている。そのため「地」は認識できない。両方同時に見ているはずなんですね。ところが図だけしか認識していないのです。この絵を天使としてご覧になる方は、この天使が図として浮かび上がっているから、背後の悪魔は見えないのです。これは反転図形ですから、どちらに見えてもいいのですが、やはりどうしてもそのときの心理的な傾向によってどちらかが優先するというようなことが出てくるのかもわかりませんね。[絵1. 参照]



絵2. エッシャー『滝』(M. C. エッシャー画集、河出書房新社より)

それから、これはエッシャーの『滝』です。どこかおかしいですね。いかがですか。どこかおかしくないですか。(会場に向かって)わかる人おられますか、手を挙げていただけませんか。どこか。あっ、あそこがおかしいですね。(スライドを指し示しながら)これは、水の流れが、平面的に同じレベルであるにもかかわらず上から下へと流れていますね。わかりますか。これは水平面です。同じ水平面でジグザグになっているはずですが、けれども、ここのところで落差があります。おかしいですね。

私たちはこのような紛らわしい図形を楽しむことができます。またこのようなものをエッシャーや安野光雅さんなどは、芸術作品としていま

す。もちろんこれらはごく特殊で稀なものです。[絵2. 参照]

私たちは心の状態に応じて現実がこういうように見えたりする場合がありますし、類似のことが絵の中に現われてドキッとするわけです。それでは『滝』の種を明かしますね。ここは水平線だけれども落差がある。実は柱が邪魔物なんです。現実には、こんなところに柱がつかないにもかかわらず柱がついているんです。つかないはずですね。けれども、柱をわざわざ、絵ですからつけてみたらここに落差があるように見えるわけです。これは、私たちの習慣化された三次元の視覚を平面の二次元に錯視として意図的にもっていているのです。

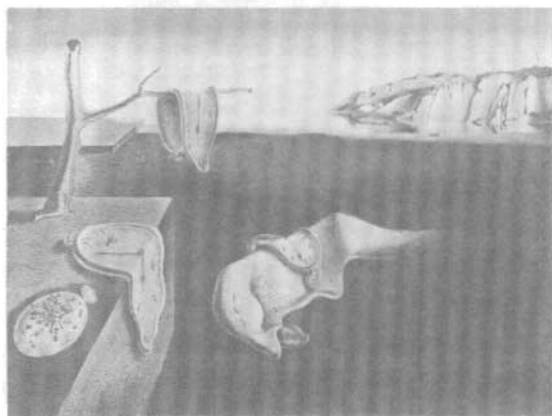
(キャンパスから出てきた『手』の絵を示しながら)これなんかは気持ち悪いですね。同じエッシャーの作品ですけれども、何が気持ち悪いかといいますと、まず平面であるということにもかかわらず立体の手が出ている。これは大変気持ち悪い。私たちの心は思考パターンが決まっておりますから、そこに、それ以外のものが入ってきますと感情としてなかなか認めにくいところがある。二次元の平面の中に、三次元の立体的な形が現われている。しかも、手というのは、非常に人格的で象徴的ですから。

哲学者のカントも、手の中に、その人の精神性はすべて現われている。あるいは哲学者のヘーゲルも、観相、顔の表情に、その人の精神性はすべて現われていると言っています。ある意味では当たっていると思います。ですから、手相術など、信憑性はともかくとして、日頃気づかない内面的なものがそういうところに収斂されている。その意味では、エッシャーがわざわざ手の表情を選んだことも的を射ている

と思います。しかも手が平面からはい上がってきているわけですから、よけいに何か不安感に襲われるわけです。

(iv) ダリの絵

もう少し気持ち悪い、だんだんと少し何か異様な世界に入っていきますけれども、いま少し、しんぼうしてください。これはダリの有名な『記憶の固執』という絵です。何が一番気持ち悪いですか。(会場の学生に)お名前を、おそれ入ります。Oさん、どの辺が何かおかしいなと思いますか? 時計なんですね。時計が溶けてしまっているというところ。アリがいる。ハチがいる。また時計が溶けている。何が気持ち悪いのかというのは、先ほど申しましたようなクロノスの時間であるならば、きちっと平板になり、かたいものであり、ちゃんと均等に時を刻んでももらわないといけないわけです。ところが、これ



絵3. ダリ『記憶の固執』
(現代世界美術全集25、集英社より)

これに対してカイロスの時間というのは、デートのときは早く時間が過ぎるように、つまり楽しいときには早く時間が過ぎるように、反対につらいときには時間が長く、何もかも止まっているように感じるわけです。この絵は、このような心の状態を表わしています。だからこれはクロノスの時間がカイロスの時間に変質している状態かも知れない。自分がここにあると確信しているのに、それが崩れていく場合があります。自己関係性が崩れた場合に、こういう現象が起こるのです。これは精神病理の世界です。[絵3. 参照]

これは、タイガー立石さんという方が描かれたトラの絵です。子どもたちの世界、あるいは皆さんも夢で見られるかも知れませんが、ここに長い石があって、それがだんだんだんだんとトラになっていって出てきたという絵です。さらにもうひとつ。ここにダルマさんがいます。ダルマさんがぐるぐるぐるぐるとひもを回していると、いつの間にか虎模様になっていってトラになる。

このようなことは、よく子どもたちが遊んでいて、「僕はトラだぞー」とかなんとか言ったりするのと同じです。これは、子どもたちの想像力(創造力)を示しています。想像力(創造力)というのは、イマジネーションという想像力と、それからクリエーションという創造力、それら両方が合わさったものであると考えます。心豊かに感じ、考え、行動するためには、こうした幼な心も必要なのです。

今のような絵とか、そしてこれから申し上げます箱庭療法というも

のがありますけれども、実はこれらは心の環境というものを探るのに非常にいいわけです。皆さんにコップを描いていただいたことも、ほんの少しですけれども、心の環境、そういうことが表われているのがおわかりになったのではないかと思います。自分がトラを見たら自分の見るトラでなければならぬと決めつける考え方が、実体化した考え方だということになります。実体化した考えではなくて、いろんなトラがあってもいいのですよというような考え方は相対化した考えであると言います。それぞれ百人いたら百人の見方があるということは、相対化された世界に、われわれは生きているのだということ。そして、その相対化された世界が基礎づけられ安定しているのは、その背後の普遍的な共通の聖なるもの、すなわち美しいもの、醜いものを含めた共通の根元的感覚に根ざしているからです。そのことを自覚することによって、認識は真に拡張されるのです。

③ 言葉の問題 ー遊びと創造性ー

それについての非常に大事なヒントは、言葉の問題であろうかと思えます。先ほどから考えてきましたように、いろいろな見方があるということと同時に、さらに言葉というものが認識と価値づけに非常に大きなキータームになるだろうと思えます。

近所の子どもさんたちにプレイしてもらいましたので、少しビデオで見ていただきます。皆さんもよくご存じの遊びです。(VTRの中で子どもたちが輪になって、かごめ、かごめをする)

“かごめ、かごめ
籠のなかの鳥は
いついつ出やる
夜明けの晩に
鶴と亀がすべった
後ろの正面 だあれ？”

この『かごめ、かごめ』は皆さんよくご存じだと思えます。皆さんのお手元にも歌詞が書いてありますけれども、改めてこのようなものを吟味なさることが少ないかと思います。注意して、少しご覧になってください。“かごめ、かごめ”という言葉が出てきますが、この“かごめ”とは何なのか。ほとんど意味を考えずに、ただおもしろいから一生懸命歌って遊んでいる。小さいころはそうだったと思います。かごめというのは、“かごの目”なのか、“囲め”なのか、“かがめ”なのか、わからない。あるいは“カモメ”なのかわからない。わからないけれども、順番にやっていたら何かその気になっていって、いつの間にかそのようなものに移っていくわけですね。ここのところに、言葉の対立あるいは緊張感、そういうものがあって、実はいろいろな歌、和歌、詩とかができている。何度やっても“かごめ、かごめ かごの中の鳥は”という場合のかごめは、囲めか、カモメか、かがめか、かごの目なのかわからない。言葉の表現では、十分理解できないまま、

「身体動作」が伴って、新しいものを感じ、考え、創造の世界に遊んでいるのです。

そして“いついつ出やる”は、いつになるかわからない。いついつ出やるというふうに言うと、何か太陽かな、あるいは月かなというような印象に変わっていきますね。自然の風景がありますから。

“夜明けの晩に”というところがありますが、これはきっと何か鳥が、カモメが向こうへ帰っていく。だけどよく考えてください。夜明けの晩という表現とは、これだけ形容が矛盾したことはないですよ。（笑い）正反対ですから。夜明けの晩にというのは、どういう意味なのでしょう。わからないのだけれども、夜明けの晩でおもしろいんです。これは反対の緊張感がこの中に入っているからです。

“鶴と亀がすべった”これも何か意味がわからない。よく考えてください。鶴はめでたい象徴です。亀も万年で、めでたいんです。鶴と亀はめでたいにもかかわらず、“すべる”と叫ぶならめでたくないのです。そのような言葉の意味がそこに含まれているとも考えられません。

さらに、これもおかしいです。“後ろの正面 だあれ？”というわけですね。後ろの正面、これも考えられないわけです。（笑い）ところが、意外とこのような中に、皆さんもお笑いになったように、笑いが出てくるんですね。こうして対立させるといえるのは、ある言葉で安定しているものを相対化しているのです。相対化の中において対立や矛盾を見出して思わず笑うというところに、絶対的な笑い、腹からの笑いが出てくるわけです。このようなことを子どもたちが遊んで、身体で体験するということが必要なのです。しかしながら、私たち現代人は、大人になればとくにそうすけれども、遊び心を忘れてしまっている。その辺が問題ではないでしょうか。だから身体動作を伴って遊ぶ、あるいは絶対的な価値に触れるということが、生命力の枯渇している現代人にとって必要である、枯渇した生命力を活性化するためには非常に役に立っているのではと考えられます。

哲学者のニーチェは『ツァラトゥストラ』の中で、軽々と遊ぶ小児になれ、あるいは人生は遊びである、と申しております。この遊ぶということ、遊ぶ中において工夫が出てくる。先ほどのダルマさんがぐるぐるやっていたら、自然とトラが出てきたわけですね。さらに続けていたらヘビになっていくとか、そのようなものがある。人生は遊びである。別の例をあげますと、車を運転していて、遊びがないようなハンドルであるとしみますと、非常に危ないわけです。ちょっと切ったらひっくり返ってしまう。しかし、遊びがあるからこそ、ゆとりがある。悠々と、ゆっくり運転できる。あるいは、自転車に乗り始めるときは、こうぎゅーっとハンドルを握ります。向こうの方に行ったら壁にぶつかるぶつかると思っても、硬直した両手ですからそのままぶつかってしまう。ゆとりが出てくると、両手を放しても右でも左

でもいけます。このように、人生における遊び、人生は遊びであるというぐらいつもりで「行動する」ことに、再び私たちは気がつく必要があるのではないかと思います。

「遊び」の話を通じて、言葉というものが、相対的にいろんな矛盾を抱えながらも、かえって矛盾しているが故に、非常に対立しているが故に、また“美しく汚い”とか、“輝ける闇”とか、何か表現しきれないものがあるからこそ、絶対のものに触れた詩の世界、ファンタジーの世界、創造の世界が広がっていくのではないか、そのようなことに気づくのであります。

④ 見えることと見えないこと

(i) 内と外をめぐる問題

さて、言葉によって物事を分節すると、はっきり物が見える。つまり先ほどのように、見えるということは「図柄」となるわけですね。それに対して見えなくなるところが「地面」として生じ、図と地の関係が出てくる。これが極端になると志向対象と認識主体という外と内との関係になり、客観と主観の水平な対立が確立する。他方、主体の内側において自覚できることと、できないことが生じる。そうしますと、これは意識と無意識という垂直な対立になるわけです。だから、言葉というものを一旦はとらえる必要があるし、言葉のすばらしさに気づく必要があるのだけれども、かえってあることをはっきり見ようとすれば、客観と主観、意識と無意識という二項対立が生じ、一方の立場からとらえきれないものや、背後に見えざるものが生じてくるということ、この辺りのことも注意していただきたいのです。

(ii) 意識と無意識

とくに、垂直面では、その背後にある見えざるものは、実は、私たちの心の奥底に抑圧されてしまう。そして、抑圧されたコンプレックスが動き出す。それが心の病の原因となる。すなわち、抑圧が過度であるなら、心の環境は汚染されてくる。そのようにつながっていきます。

ところで、この無意識の世界を発見したのはフロイトですけれども、彼は「夢は、無意識の願望である」あるいは「夢は願望充足である」と言います。現実には実現できないものを夢の中で実現していくことによって、人間は心のバランスをとっている。ですから、現実にはやってはいけない事柄を抑圧することによって、何とか対社会的には適応できているけれども、その分だけ抑圧され無意識界に閉じこめられたコンプレックスが意識の亀裂からうごめき出す。気がつかず思わぬ行為をする、言い忘れをするということなのです。これは、錯誤行為と言われます。皆さんも経験あるかと思いますが、いやな人の名前は、なかなか思い出しにくい。あるいはカウンセリングをやっておりまして、終了してから「忘れ物ないね」と言っているのに、クライアント（患者

さん)は研究室にまた戻ってくる。「あの一、傘忘れていました」と言う。このような場合、もう少し話を聞いてほしいという無意識の願望があるわけです。普通の人には、それを夢の中で果たすことによって内外のバランスをとっています。つまり、意識と無意識は相補的な関係にあり、どちらか一方を切り捨てることはできない、ということです。この見えざる無意識の世界も、人間にとって大切な生存基盤です。

三、「感じ、考える基盤」としての環境

① 内なる環境 —精神病理の問題(箱庭療法)—

ところで、無意識の願望がうまくいかない場合にどうなるのかということ、を、少し次に考えていきたいと思えます。

まず、感じ、考える基盤としての「内なる環境」を考えていきたいと思えますので、スライドを見ていただきます。

ただし、病気であるとか神経症の場合に、こういうところで公表いたしますとプライバシーを侵すことになります。ですからこれからご紹介する皆さんはすべて正常です。ただ、正常であっても、やはり時には私たちも、月曜日の朝に学校に行く、会社に行くのは億劫ですよ。これをフロイトは、「月曜日のかさぶた」と申します。私たちはそのような状況、あるいは仕事がなかなかかどらない場合にストレスがたまり焦ります。そのような状況が、今からお見せするスライドの中に反映しています。

これは、「箱庭」という小さな宇宙です。その中に、おもちゃでプレイしていただきます。これをやることによって神経症は治っていきます。(時間に追われて、焦っている学生の箱庭のスライド)ここに道路があって、バイクに乗った彼がいます。後ろの方からヘリコプターそして怪物が襲っている。これはどういうことをあらわしているかということ、非常に焦った気持ちなんですね。これは、彼がクラブの部長をやっている、学祭が迫ったときのことで、学祭の準備にみんなが動かないから自分が一人でバイクで走っているわけです。“さあ、ついておいでよー”ということなんです。後ろから怪物が襲っている。何の怪物でしょうか?“時間という怪物”に追われているのです。そのようなものがこの箱庭の小さな宇宙の中に現われてまいります。

また、箱庭には、いろんな事柄の流れが示されます。(曼荼羅模様の箱庭のスライド)こうした曼荼羅模様の箱庭をつくる場合に、その人の意識が変容する前徴です。これから変化するなという感じになります。それは、いいように変化する場合と、悪いように変化場合がありますから、私どもカウンセラーの場合に、ちょっと踏ん張らないといけないときなのです。このスライドの場合は非常にいいんです。全体にバランスがとれていて、明るい雰囲気がありますから。ただし、よく見て下さい。ここのところで車が押し合いへし合いしています。

全体に変化しようとしながらもまだまだ焦る気持ちがあるというのが、この箱庭でわかります。

(別の曼荼羅模様の箱庭のスライド) 同じように曼荼羅模様なのですけれども、この場合の変わり方というのは非常に激しいですね。大きなヘビがいて、ここにゾウ、カバ、トラ、そしてサイがいる。何とか変わろうとするのだけれども、もし無理やり変わったら、つまり、自分のあり方いわゆる自己の関係性、お母さんとのかかわり合い、あるいは友だちとのかかわり合いを無理して変化していい子になったとするならば、ひょっとしてゾウがサイの方に渡ってけんかし出すかわからないわけです。そのような危険性を持っている。バランスがとれて、気持ちが落ち着いていったならば、いいように変容するだろうな、変化するだろうなということは予知できます。しかし、無理は禁物です。その反動を考慮しなければいけませんから。

(表面は穏やかだが、内面に激しさを秘めた少年の箱庭のスライド) これは、ちょっとショッキングな作品です。この子の場合も、内面的な感情の激しい側面を示していますが、病的な子ではありません。しかしながら、非常に怖いですね。骸骨が首つりしています。ここへ怪獣が襲ってきて、サメやフカがいて子どもを飲み込んでおります。新幹線が脱線して、飛行機



写真3. 内面に激しさを秘めた少年の箱庭

がこの背後で墜落しております。横から見ます。これが骸骨の首つりです。そして、恐竜の戦いが出てくる。ここでは車がひっくり返り、さらに飛行機もさかさに墜落しています。[写真3. 参照]

彼は、私が教えていた子どもさんでしたから、それでよかったのですけれども、極端な場合、最悪のときに「僕は、プラットホームにいて、幼稚園の子が遊んでいたら、パッと突き落としたいくなる」というようなことを言います。そういう場合に、やはりこちらが見てあげなければならぬときがあります。しかしながら彼の場合は病的なところまで行ってなかったのです。一見すると恐ろしいこの骸骨は、いまの自分を殺して新しい自分になりたい、という願望を表わしております。ユング流に言いますと、これは死と再生のテーマです。ですから、この怖い現象だけを見てネガティブな否定的な評価をしてはいけません。できるだけその人のいいところや可能性を見てあげること、評価してあげること、そのように導くことが必要になってきます。

(同じ少年の別の箱庭のスライド)最初に都会をつくったのですけれども、これでいいんですかと言うと、バレーボールでボーンと都会をつぶしてしまいました。彼自身はまだこれから生産的な方向へ向かう状況ではなかったのです。だんだんと落ち着いてくると、(同じ少年の別の箱庭のスライド)こういうしっとりとしたものをつくる。箱庭は一つのストーリーを表現します。そういうような形で、長い目で少年たちの成長を見ていく必要があるだろうと思います。

病的なクライアントの場合は、もっと明確に「内なる環境」があらわれます。そして、この内なる環境の崩れが問題です。これが激しく出てくるときがあります。その内なる環境は、見ていただいたように、箱庭というおもちゃによる言語化で観察できるのです。それは、象徴言語によるのです。それをこちらが感じ、把握することが必要なわけです。ですから広義には、言語表現は多様な方法があるということ。狭義の言葉が相対的であるということと同時に、言葉が、日本語とか英語とかドイツ語などだけではなくて、もっと広く身振り言語、表情、身体症状、舞踊、絵画など象徴言語としてとらえる必要があるのではないか。狭義、広義の言語使用が崩れている場合には、自己把握の仕方が崩れていることを表わします。それが、内なる環境の汚染である。そのように思います。

自我というのは、今まで述べてきましたような言語使用を通じて、家庭内の人間環境からでき上がります。ですから、やはり子どもの教育をする場合にコミュニケーションのとり方が非常に大切になってきます。一方でたて前だけのいいことばかりを言い、背後の悪いところを子どもに見せない場合、これは非常に問題が出てくる。むしろお母さんであれ、お父さんであれ、理想的であると同時に、ちょっと抜けたところを示すというのか、狭義の厳しい言語使用だけでなく広義の感情面の言語使用も含めた形で、あるがままに接していただくことが必要になるのではないかと思います。

少し時間が過ぎましたので、お疲れかと思います。十分間休憩いたします。

〈休憩〉

ソーシャルの言語の話の所が、少しむずかしかったと思います。言語学者の丸山圭三郎さんの挙げておられる例で補足します。言葉が相対的であるという意味はどういうことかということ、分節が生じるということ、まず二項対立が前提となるということ、そして次に言葉の恣意性ということ。言葉の恣意性とは、一つはある単語をその言語体系では自由に名づけているということ、二つは単語の価値形成の恣意性です。とくに後者の恣意性について言えば、私たち日本人の場合には、虹は何色でしょうか。虹は、七色ですね。これが、アメリカ

人の場合でしたら、六色なんですね。単語の種類として六色なんですね。それから、ローデシアのショナ語の場合は虹は三色、リベリアのバッサ語は二色でしか表現できないわけです。別の例をあげますと、鶏が鳴きました。私たち日本人には、どのように聞こえますか。コケコッコですね。ところがアメリカ人はクックワドゥードゥールドゥーです。あるいは日本人には犬がワンワンですね。ところがアメリカ人だったらパウパウです。そのような言語文化の相違のあるところでは、ワンワンという犬の鳴き声が絶対正しいというようには言い切れないのです。だから、自分がいかに日本語を上手に使ったとしても、実はそこには相対的な限界があるということなのです。しかしながら、そのような限界を突き抜けたところで、つまり相対価値を突き抜けたところで、犬のかわいらしさは、日本人であれ、アメリカ人であれ、イギリス人、ドイツ人であれ同じようにかわいいわけです。その同じように絶対にかわいい事柄を、私たちは頭のみで考え理解をするのではなくて、どのようにそのかわいらしさに触れるかの問題だと思います。そうしたところが、「心豊かに行動する」ことにつながっていくだろう、というのが今日のお話です。

② 外なる環境 — 環境・社会病理の問題 —

次に、「外なる環境」について考えましょう。私たちが自己把握する場合に、自分自身に対して厳し過ぎたり、自分に対して甘くて他人に厳しい、そういうような関係性が自我を形成しているのは、非常に具合が悪い。内なる環境が、自我とその人の人間性に影響を持つとするなら、そしてもしそれらが歪んでいるなら、人間は外に働きかけますから、外の環境をも崩していくことになるのではないか。現実的にこうした非常に怖い現象が起こっています。

社会病理といいますと、普通は非行とか、登校拒否とかを言いますが、環境的な問題も含めて取り扱っていききたい。私が社会病理という場合、「環境病理」も含んでいることを一つお断りしておきたい。そして、これから「奇形ザル」という表現を使います。これは、もうすでにそのような文献がたくさんありますので、あえて奇形ザルというように申し上げますけれども、この「奇形」という言葉を差別用語であると取っていただくと具合が悪いわけです。その辺りをあらかじめご理解願いたいと思います。

それでは、外なる環境破壊を示すスライドを見ていただきます。

(i) 危険な食べ物

(農薬で「ただれた手」のスライド) これは、農薬によるものです。農薬が手にかかりますとこのように腫れ上がります。この背後には、企業の問題、利益追求第一という問題がある。それは、自分のことだけよかったら他のことはどうでもいいという心の「内なる環境」の問題が反映している。

(アトピーの赤ん坊のスライド) それから、最近アトピーが非常に

増えています。お母さんがやはり汚染されたもの、添加物などを含んだものを常時長く食べておられますと、このような体質の子どもになりやすい。この赤ちゃんは、食べ物によって改善しました。しかし、いまは非常に多くの食料の汚染、つまり添加物、残留農薬などを含んだ食料があるので、こういう症状があちらこちらに起こっているように思います。[写真4. 参照]



写真4.アトピーの赤ん坊のスライド

(漂白されたレンコン、イモ、ヤマイモ、ゴボウのスライド)次に、漂白剤の例です。レンコンが、漂白剤を入れる前の未処理の状態はこの色です。二分後、十分後、三十分後でこれだけきれいになります。このような見栄えのよいものでないと売れない。これは生産者の側が一方的に悪いのではなくて、あるいは消費者がこれを望んでいるわけではないんです。それは、そのことを強制する流通過程に問題があると思います。要するに見栄えがよければみんなが買う。他人はどうであっても、自分だけ利益が上がりさえいいという発想。こうした内的に汚染された人間性が根本的に問題ではないでしょうか。

(腐食した水道管のスライド)これは水道管です。一度つくったら完璧だと言いきれませんが、人間がつくるものでは、せいぜい二、三十年ではないかと思えます。話が少しそれますが、たとえば原子力発電について、これは半永久的に大丈夫だとの発想ですけれども、原発の場合は耐用年数が約三十年です。さらに廃棄物をどうするかというと、その処理もできない。梱包するということのだけれども、コンクリート詰めにしたところで四、五十年でしかないわけです。ところが他方、プルトニウムとかウランなどの放射物は、分解してしまうのに何千年、何万年とかかかるわけですね。それを人間の知恵で、科学で作り出したから科学で補うことができる、処理できると考えるのが、非常に何か浅薄な感じがいたします。何が正しいのか、何がやっていいことなのかをもう少し考えなければならぬように思います。

(毒物が混入した油を食べた婦人のスライド)日本ではカネミ油症

事件がありました。同じように外国の方で、数か月前これだけ美しい彼女が、毒の添加物の混ざった油で料理したものを食べた。そうするとこれだけ変化したわけです。こういう危険性はどこにでもあります。

(成長促進剤入りの牛肉を食べた少女のスライド) これはプエルトリコの女の子で八つの子です。牛肉を柔らかくするため耳の後ろに女性ホルモンを埋め込みます。それが次第に溶けていって成長を促進し、肉を柔らかくするのですけれども、それが溶けないままにその肉を食べますと、この少女のように生理が来て、そして胸も大きくなっていく。アメリカでは合成型の女性ホルモンの使用が認められており、日本でも天然型の女性ホルモンは禁止されておりません。このようなわけで、危険な食べ物がいっぱいなのです。

(チェルノブイリの原発事故後に生まれた豚のスライド) これは、チェルノブイリの原発事故で被爆した親から生まれた小豚です。右目がこんなに大きくなっています。このようなこともいつ起こるかわからない。三十何基も日本にあるのです。チェルノブイリ級の原発が。一つ爆発すればもう日本は終わりかもわかりませんね。

(ii) 奇形ザル問題

今まで述べてまいりましたような危険な食べ物によって、このような奇形ザルが生まれています。(ミイラ化した奇形の子ザルを抱く母ザルのスライド) これは、「ユンデの哀しみ」という写真で、大谷英之さんという写真家が撮られたものです。ユンデという母親ザルと抱かれているのが彼女の子ザルですが、ミイラ化しております。その記事がありますから少し読んでみましょう。

「あるエピソード、ユンデの哀しみ。昭和五十年八月の蒸し暑い日、私は、大分県高崎山で一組の母子ザルに出会った。いつも何かを訴えるような目をしたひ弱な子ザルと、それをいたわり、かばい続けるユンデと呼ばれる母ザルの姿には、何か強く心を引きつけられるものがあった。私は、しばらくの間、この母子ザルに会うため毎日高崎山へ通い続けた。ユンデは、子ザルをしっかりと抱いたり背負ったりして少しずつサルとして生存するための知識をわが子に教えようとしていた。木に登り、枝から枝へ渡り、崖をはい登る。ある日ユンデは、自分だけ先に崖を駆け登り、下を見おろして子ザルを呼んだ。『さあ、早くおまえも登っておいで。母さんと同じようにして登ればいいんだよ。』だがどうしたことか、子ザルは何度登ろうとしても途中で下にすべり落ちてしまうのである。ユンデはそれをじーっと見つめ、叱咤し、もう一度自分でお手本を示し、ついには子ザルを背負って再び崖を駆け登った。ところがその途中で、子ザルは母の背中から離れ崖下にたたきつけられたのである。崖の上からユンデは動かなくなったわが子を不思議そうに見おろしていたが、急いで下に向けおると、しっかりと胸に抱きしめ、いとおしそうにほおずりし、それから子ザ

ルの唇に自分の乳房を含ませたのである。しかし、すでに息絶えていた子ザルには、乳を吸うすべはない。するとユンデは、みずからの口に乳を含み、口移しで子ザルに乳を飲ませようとした。子ザルの唇の端から白い筋を引いて乳が流れた。私はこの光景を目撃し、胸が熱くなったが、これでユンデもわが子の死を確認するだろうと思ったのである。ところがユンデはいつまでもあきらめなかった。二日、三日、五日、七日、子ザルの死体は硬直し、やがて悪臭を放ち、ミイラ化して部分的に白骨化していった。人間たちは、彼女から子ザルの死骸を取り上げようとしたが、ユンデは決して離そうとはしなかった。悲しそうな眼差しをミイラのわが子に注ぎ続け、両手で揺さぶり、そして抱き上げ、何とかして蘇生させようと必死で行動する彼女の姿は壮絶だった。」(大谷英之写真記録集『奇形ザルは訴える』)という状況がここに書かれています。そのユンデは、わが子がミイラになるまで抱き続けていた。私たちは、研究室から淡路島のモンキーセンターに七年前と本年行ってまいりました。すぐあとにビデオをお見せいたしますけれども、センターの資料館にパネルがあって、そこで高崎山で撮られたユンデの写真を見たわけです。何をしているのかなと思っていたのですが、よく見るとグルーミングしているのがわかりました。グルーミング、いわゆるノミ取りです。本当にノミを取るのではなくて、塩分とかミネラルとか、ダニを取っているのです。そして、ミイラとなったわが子に、彼女はやっているのです。胸を見て下さい。まだお乳が張っているんです。彼女のわが子への思いというのは、たとえサルでも、生き続けているわけです。だからこそ胸の乳が張っているわけです。そうした親の愛情というものを見て欲しいのです。この子ザルがひ弱かった原因というのは、どうも食べ物らしい。人間が食べているのと同じもの、汚染された食べ物がひ弱な子ザルの生まれた原因のようです。

(四肢奇形の子ザルのスライド) 最悪の場合に、こういう両手両足のない大五郎というサルが淡路島のモンキーセンターで生まれました。

(一本角の鹿、O脚のヤギ、背骨の曲がった魚のスライド) 宮島の鹿も、片一方が角が出ていないとか、ヤギですけれども、O脚のこのようなヤギが生まれたり、それから魚が背骨が曲がっているとか、何かがおかしいということは、うすうすお気づきのことだと思えます。

(iii) 研究室からの報告

それでは、ここで、私たちの研究室から行ってまいりました本年八月の調査したビデオの記録がございますので、少し見ていただきましょう(甲南大学谷口研究室奇形ザル調査記録VTR)

(奇形ザルの発生状況の表) 日本全国に発生しております。黒い点のところは10%以上の奇形ザルが出ているところです。主に長野県の地獄谷、岡山県の臥牛山、淡路島のモンキーセンターが非常に発生率が大きいです。とくに淡路島の場合、昭和46年のときに70%を超えま

した。七年前にも私たちは行ってきましたが、本年八月に再び行ってまいりました。本年こそはそういう奇形ザルの赤ちゃんは生まれてないだろうと期待して行ったのですが、実際は五頭生まれていたのです。

淡路島のサルたちは親和性が高い。お互いが助け合い、ボスザルと、見習いザルとか、メスザルとかの間に序列が厳しくないのです。とくに奇形ザルの場合に、成獣が、親たちが、しかも肉親の親でなくても全部かばってやっています。その辺のところは非常にすばらしいと思うのです。

よく注意していただきますと、このデンという五歳のオスザルは両手両足のところ、グーの状態になっています。これを合指（合わさった指）といいます。餌付けしたサルには四肢奇形が多いのです。裂手（裂けた手）、屈指（曲がった指）、短指、それから合指の極端な場合にはミラーフットといいます。九本指のサルも生まれています。

これはミナトという五歳のメスザルですけれども、手首から先がありません。足も非常に不自由です。しかし、幸いなことにこのサルたちは、先ほど申しましたように、親和性が高いので、協力し合いながら自然群の中で元気よく生きております。

（新生児の場面）六月生まれの奇形の子ザルたちです。〔写真5. 参照〕この水飲み場にみんな集まるんですね。そして水遊びをします。足が曲がっています。これは別の子ザルです。手が裂手になっています。まだ子ザルで母ザルが抱えている間はいいのですけれども、それ以降は大変です。



写真5. 1990年生まれの新生児
（於、淡路島モンキーセンター）

『がんばれコータ』という中橋 実所長さんが書かれた本があります。コータは両手両足が全くなくて、中橋さんがおしめをして世話し、家族のように育てました。ただ残念ながら今年の一月、出版と同時にコータは九年間の生を全うしました。この中橋さんは非常な人格者でして、現状を訴えるためよく講演なさる。岡山で講演されたときに、奇形ザルが多数発生して、人間もこのままではいけない、そんなお話をした。そのあとにあるお母さんが来られまして、「中橋さん、このような訴えをしていただいてありがたく思います。食べ物のせいかもしれませんが、実はうちの長女がそのような裂手なんです。」と。話を要約しますと、妹さんが生まれました。妹さんが寝ているところに幼稚園から帰ってきた長女が、お母さんは横で食事の用意をしていたのですけれども、自分の手を妹さんの手に重ねて、妹さんの名

前を呼んで「よかったね、指があってよかったね」と言っていた。もう二度とこのような悲しい思いは、誰であっても、味わって欲しくない、と言われたそうです。何か身近なところで、いろんなところがおかしいという状況が起っています。

また、中橋さんは次のようにも言われました。何が情けないといっても、資料館での説明を真剣に聞いてくれていたあるお母さんが、帰るときに事務所にいるおしめをしたコートを見て、「コートかわいそうね、コートかわいそうね」と子どもに言ったことだと。中橋さん曰く、何を私は一生懸命訴えていたのかわからない。奇形ザル、あるいは障害を持った人も、自分をかわいそうだとは思っていないはずなんです。それをそのようにもっていく親の教え方が問題ではないでしょうか。その「かわいそうに」という同情の言語表現に、自分が正常であって優位にある、そして、奇形である、障害であるということは劣位である、ということが相対的に裏返して出てきているわけです。けれども、心からかわいそうと言った場合は、その「かわいそう」は絶対的な気持ちとして相手に通じるはずです。その場合には、ときにしかってもいいわけで、一方的に甘やかす必要はないのです。そのような、あたりまえの心からわき上がる感情を伴った価値、これは心底からの笑いであり、心根からの悲しみなのです。それこそが普遍的なものではなからうか。相対的な同情の言葉を飛び越えた絶対的なものがあるのではなからうか、そう思います。以上、外なる環境の現状を見ていただきました。

③ 発想の転換 一人間本性の課題一

次に、「外なる海から内なる海、さらに内なる世界から外なる世界へ（発想の転換）」とレジュメに書いてございますが、実は一昨年、水俣市に研究室から行ってまいりました。そこに、砂田 明さんという、一人芝居、「天の魚（いお）」をなさっている方がおられます。八月に水俣市でお会いして話を伺って、その年の十二月に神戸のシーガルホールにお招きしました。砂田 明さんは、新劇の俳優さんでしたが、東京から水俣へ移られて、上村智子さんという胎児性水俣病の患者さんに会われました。彼女のことを、私たちに「月の浦のジャンヌダルクだ」と話してくれました。外なる海である水俣湾が汚染されると、内なる海も、これは母胎、羊水ですが、汚染される。したがって上村智子さんは胎児性水俣病として生まれてきたのです。けれども、智子さんは救いの神であった。第一子であった彼女は、お母さんの体にたまった有機水銀を引き取ったために自らが胎児性水俣病として生まれました。そのお陰で、あとの弟妹たちは五人生まれましたが、すべて健常だったのです。智子さんのお母さんは、「智子は私の宝子です。」そのように言っておられます。私は、砂田さんからその話を聞き、智子さんは人類の宝子ではないかと感じました。

ここで、考え方を転換したいと思います。外が汚れたから内が汚れ

たのではなくて、むしろ「人間本性の世界」の汚染が、つまり内なる環境破壊が起きているから外なる環境破壊が起きているのではないか。そのように発想転換して、いままでのお話をまとめようと思います。

四、行動すること

① 科学の立場 - 事実の問題 -

そうすると、「行動すること」というのは、まず、科学の把握する事実問題に従うこと、事実を正確に把握することが大切です。これはやはり大事なことでして、科学の判断は何もかもだめだと批判しているわけではないのです。現代の常識を形成している科学「主義」的な考え方だったら安易にすべてが相対的になってしまうからだめです。しかしながら、科学主義だけでなく、厳密に言えば科学もやはり相対的なとらえ方をします。けれども、いわゆる価値中立的な答えしか出さない科学の答えは、残念なことに「～すべし」は言っていないのです。「～すべし」という規範的な考え方は言っていないのだけれども、事実として科学的に証明されたから正しい、だから科学のというような形でやるべきだという考え方があるのです。それが問題ではないかと思えます。事実からは相対的判断のみで、規範は出てこず、ニヒリズムに陥るからです。

たとえば社会科学を代表する経済学の方で、効率主義、利潤極大の原理というのがあります。その発想を認めるにしても、実は近代経済学、マルクス経済学、それぞれ限界がある。社会体制は異なっていますが、生産第一だという基本的な考え方がある。その発想は科学モデルによるわけです。ニュートン力学のモデルは、ある確定した答えが出る方向で分析していく。したがって、経済学も、すべてのものは答えが確定し可逆的であると考えます。この「可逆的」とは、相対的な繰り返しができるということです。この可逆的の具体的な意味は、経済的には、物をつくるということです。再生産ということです。ところがよく考えてみますと、物をつくること＝壊すことなのです。物をつくるためには、やはり元のを壊さなければならない。生産面を重視する近代経済学とは違って生産は消費であると、マルクスは言います。つまり、生産のみならず消費も考慮しています。しかし、マルクスにしても、すぐに限界があるわけです。何の限界かということ、そのような経済学は、基本的に科学モデルであるために、生産にしろ消費にしろ、すべてを相対的に、したがって可逆的に閉鎖系のみを考える。繰り返しができ、そのように考える。具体的に申しますと、たとえば皆さんが布地で服をつくったといたします。そうすると、布をぎりぎりいっぱい使ったとしても、この服に必要なない端切れのところは実はむだなんです。その意味で、服をつくるということはこの布を壊すことであるわけです。たしかに生産するということは消費するんです。ただ、

これがうまく対応していたらいいのだけれども、ここに端切れというむだが出てくるわけです。これが廃棄物、ごみになるんです。亀岡はごみの収集で分別が最近行われつつある。非常に喜ばしいことだと思います。たいてい表にあらわれた明るいところだけ、生産物だけを見るのですが、このむだについて考えることこそが大切ではないでしょうか。マルクス経済学の場合、近代経済学の生産重視に対し、消費概念に注目したまではよいのですが、それは可逆的な閉鎖系にとどまり、廃棄物にまでは考えが及んでいません。

こういうふうにもうだが出てくるというのは、実は布地という秩序的なものが、服と端切れという無秩序になっていくことです。これを少しむずかしい言葉でいいますと、物理学では熱力学の第二法則、つまり「エントロピーの増大」と申します。たとえばボールを並べている。それを棒でポンと突いた。そうするとバラバラに拡散します。あらゆる秩序ある物事は、このように無秩序化していくという方向にあります。逆の方向である無秩序を秩序化することは、もうこれはほとんど不可能に近い。生産効率ばかりを考えて、すべては可逆的であるとする場合に、そのシステムから産出された無秩序の廃棄物をどこに持っていくかということ、生態系に持っていくわけです。生態系は、人間がつくったもの以外、すなわち自然のものであったら、水や大気の循環によってエントロピーの増大を防いでくれます。低エントロピーという形の定常開放系でいけるわけです。そのような方向で、生命循環が成り立っています。ところが最近では、プラスチックがある。あるいは排気ガスがある。どんどん温暖化していく。それから酸性雨がある。森林伐採がある。砂漠化がある。すべて常に再生産が可能と考える経済効率一本でやる。このような可逆的な閉鎖系によった発想では、そのような「凶」である系を成立させている定常開放系という「地」のことは視野に入っていません。

ところで生態系というのは、実は定常開放系で不可逆であるわけです。生態系というのは、そして生命というのは不可逆である。これを、忘れてはいけません。その代表は何かということ、人間です。人間の不可逆性というのはどういうことかということ、私たちの人生は、一回限りの独自性を持ち、そのつど生き方を選択していく。そのつど責任をもって生きる道を選んでいく。これが人間のあり方なんです。だからそれを「実存性」と申します。この生命が絶対で不可逆であるということは、たとえアリ一匹であっても私たちはその命を奪ってはならないという原則を示しているのだと思うのです。だけれども、便利さ、利益を追求していく場合に、相対的に勘案してむだはエコノミーのシステム外のエコシステム（生態系）に全部廃棄していきます。プラスの方の生産性、そのようなものばかりに照明が当てられている。よろしいでしょうか。生産にスポットライトが当てられて「凶」となり、はっきりものが見えるようになった。その分だけ、明るければ明

るいほど影が出てきているのです。そのマイナスの「地」の面というのは実は生態系である。そのことをどうしても忘れてはならないと思います。そのマイナスの面というものに、何とか私たちは気づき、そして再び全体の視点に戻っていく。私たちは昼に活動するために、夜になったら目をつぶって暗いところで眠ることによって、生命力の全体がもう一度回復されるわけなんです。

不可逆な開放系を考慮しない科学や科学主義は、相対的次元にすぎず、規範としての方向づけを与えません。ただ具体的な事柄について判断・把握するだけです。

② 哲学の立場 - 価値の問題 -

その意味では、このような科学主義が作り出す常識のあり方をもう一度考え直すことが必要です。便利さというもの、スピードというもの、そういう相対的な価値づけをもう一度反省してみることです。科学の知識によって、客観的にどこまで理解できるかは知っている必要はあります。だけれども、それをもう一回再び価値づけし直すこと。これが、絶対価値を求める哲学の仕事であるのです。もちろん、哲学といったら大層です。皆さん自身のお考え、それを、これがこうあるべきではないかともう一度反省していただくこと。そういうことが哲学の扱う問題なのです。そのように考えていいのではないかと思います。それでは、現実はどうすればいいのかというと、科学は事実把握を正確に行うということ、そしてその事実把握をしっかりと価値づけるのが哲学である。したがって、両者は相補的関係にあり、それぞれの機能と限界を知るといふことであると私は考えております。つまり、科学による正確な事実認識と科学主義による越権を自覚した上で、それを哲学的思考による価値づけ、意味づけを社会的同意の上で行うということです。

ポルトマンという生物学者がいました。彼は「人間は生理的早産である」と言っています。人間は完全に生まれてこなくて、幼児の間も、さらに義務教育までとか、あるいは二十歳まで子どもを育て、自立させていくのに大変な時間がかかります。したがってすぐ自分で立ち上がって自立する動物と違って、人間は生理的早産である。だから人間というのは外に依存せざるを得ない。さらに、バーガーという社会学者が言っていますけれども、「人間は生きていくために外に求めざるを得ないから外在化する」と。そして自分が働きかけて外在化したものは客観的なものになって、逆に自分に迫ってくる。自分の思うようにならなくなっていくわけですから、これを「客体化」といいます。それを再び今度はもう一回自分のものにしなければいけない。それを「内在化」といいます。このプロセスが人生である。そのようにバーガーは人間存在をとらえます。

ですから、私たちの人生は、生理的早産であるがゆえに、きちっとこのように生きたらいいということは予めわからない。だから外に働

きかけていって（外在化）、働きかけたものについてまた自分が働きかけられて（客体化）、それを吸収していく（内在化）。そのプロセスに「人生の意味」の発見がある。したがって、人間が存在するということ、その存在自体によって人間は人生の意味を問われている。だから人間は、その未完成な存在によって、どういう人生を歩んでいったらいいのか、どういう意味を求めて生きていったらいいのかということ完成に向かって問われているのではないのでしょうか。

ここまでお話してきて、現代人、そして私一人ではなくて皆さんとご一緒に、どのように生きていったらいいのか。二十一世紀の将来に向けて、少なくとも現実には内外の環境破壊が起こっている、それに対してどのように「行動」し解決していったらいいのかということ、
“哲学していかなければならない”と思います。

五、心豊かに感じ、考え、行動すること

① 地域主義 一等身大の思想一

いよいよ最後ですが、「心豊かに感じ、考え、行動する」ために、内なる環境と外なる環境の基盤である心のふるさとのことを考えたいと思います。大切なことは、「地域主義」ということを考える必要があるのではないか。言葉が作り出した幻想的な文明さらに文化によって、私たちは何をしてもよいというように、勝手に理想像を描いて自我肥大を起こします。他方、それに対してちょっとしたことで失敗する。自我卑小、あるいは自我縮小を起こします。そのような現実から遊離した自我ではなくて、われわれ自身が「等身大」になることが大切です。つまり、実体観を相対化し、さらに相対観がニヒリズムに陥ることなしに、等身大にまず感じる必要があるではなからうか。

自我肥大、自我縮小が起こるのは、言葉によります。やはりここでも言葉の問題になります。それはどういう意味かということ、言葉によって人間は現在、未来、過去を認識します。「現在」は、“いま、ここで”という時間・空間に縛りつけられています。しかし、それのみでしたら本能の次元です。

ところが、私たちは「未来」について夢を描くことができます。さらに、過去についてはよき思い出を持つことができると考えます。しかし、自我肥大や自我縮小の場合だったら、夢を描いても、実現できないかもしれない。失敗するかもしれない。そうすると、夢が描けるところで表裏一体して不安になります。とくに実現不可能であるならば。私たちはありもしない不安に襲われてしまうんですね。いまここを離れるという利点があると同時に、いまここを離れることによってかえって不安の中に入って行く。不安神経症の人たちなんかはこのような場合です。

それから「過去」ということについて考えますと、思い出というのが、必ずしもいい思い出ばかりではないんですね。傷を負った幼児体

験。フロイト流に言う「原体験」。神経症者は原体験に縛りつけられているから、同じようなつらい出来事が起こると再び同じ反応になる。台風がもし小さいころに怖いと体験されていると、台風が来ると吐き気がする。その当時、吐いたことがあるから。そのようなことが私たちの体の中にメカニズムとして形成されてしまうわけです。

そうすると、未来、現在、過去を作り出すそのような言葉というのは、いい面と同時に悪い面があるわけです。マイナスの面もある。それをやはり冷静に評価しなければならない。そうすると、神経症者のみならず、自己中心的な現代人には自我肥大や自我縮小が起こったりしておりますから、もう一度、「いま、ここで」の次元に、つまり「等身大」の尺度に戻す必要があるだろう、等身大の本能的生命力と実存的価値基準に戻す必要があるだろうと思います。

さらに、神経症から離れて、現代人の価値判断の特徴を述べますと、「いま、ここで」を離れるということはどういうことかということ、これは視覚優位の判断です。ある意味でこの視覚優位というのは理性的です。非常に冷たいわけです。ところが、等身大というのは何かというと、触覚なんです。この触れるという事柄が必要なのです。たとえば具体的に鉄砲で相手を傷つける、あるいはミサイルで相手を傷つけるとします。このことは余り心の痛みを感じません。ところが、私どもが自分でナイフでもって相手を傷つけたら、これはものすごい良心の呵責に襲われます。これは自分でそのまま接触しますから。それが等身大のとらえ方です。

そのように考えるならば、合理的な判断が絶対正しいとはいえない。これは時代によって違うんですね。中世あたりであったら聴覚優位です。聴くということが優位なんですね。現代では合理的な視覚優位です。だから視覚が優位になりすべてが冷やかになりすぎているところで、温かい触覚の次元を回復する。別の言葉でいうと、私たちは現実の人と人との関係でスキンシップが大事ではないかということですね。直接的な触れ合いを判断の次元までもっていく必要があるのではなからうか。それができるのは「地域」においてである、そのように考えてよいかと思います。

② 環境教育と子どもたち 一心の環境の大切さ

地域ということを考えますと、たとえば玉野井芳郎さんという経済学者は、「地域は、一定の地域の住民が、風土的個性を背景に、その地域の共同体に対して一体感を持ち、みずからの政治的・行政的自律性と文化的独自性を追求することをいう。」と述べています。私自身の言葉で申しますと、地域というのは「心の環境」ではなからうか。濃淡のある時間・空間という「心のふるさと」ではなからうか。そのように思います。子どもたちに地域主義としての環境教育がこれから必要になってくると痛切に感じておりますし、幸いにして亀岡の子どもたちが、自然の中で泥んこになって遊んでいるような風景も見受け

られます。そういうところで、私は環境教育と子どもたちについての考え方をこれからも深めていきたいと考えています。

③ 小さな幸せと平凡さ — 宗教心 —

そこで、再び私たち自身の問題に戻りまして、障害者であるにもかかわらず、素晴らしい人格を持った方をご紹介しますと思います。ビデオをお願いします。

星野富弘さんは、中学校の教師になった六月、器械体操をやっていたとき不慮の事故で、首から下が麻痺しました。これは彼の描いた『はなきりん』の絵ですけれども、辛うじて口で絵筆を持って絵と詩を書いておられます。四つほど紹介いたしましょう。

「動ける人が動かないているのには忍耐が必要だ。私のように動けないものが動けないているのに忍耐など必要だろうか。そう気づいた時、私の体をギリギリに縛りつけていた忍耐という棘のはえた縄が“フッ”と解けたような気がした。」これが『はなきりん』の詩と絵です。[絵4. 参照]

それから、これは『おだまき』です。「いのちが一番大切だと思っていたころ生きるのが苦しかった。いのちより大切なものがあると知った日、生きてるのが嬉しかった。」

自分はあれもこれもできると思っていた五体満足のとくに、実は何もできてなかった。その後の事故で、たまたま口で絵筆を持つことができ、絵を描けた。それだけでいい。しかし、なぜ自分だけがこんな目に遭ったのだろうかと相対知の次元で悶々とした数年間があった。ところが『はなきりん』の絵を描いたときに人生の転回、「宗教心」というものが起こって、初めてふるさとと自然が見えてきたのです。等身大の世界なんですね。自分の苦悩とか自由にならない現状ということに認めたとき、絶対価値の等身大の世界に入った。そのときにまた新しい世界が広がって、この『タンポポ』のような感じだったのではないかと思います。

「いつだったか、きみたちが空をとんで行くのを見たよ。風に吹かれて、ただ一つのものを持って、旅する姿がうれしくてならなかったよ。人間だってどうしても必要なものは、ただ一つ、私も余分なものを捨てれば空がとべるような気がしたよ。」[絵5. 参照]

星野さんが達した等身大のこの境地が、地域という「心のふるさと」に生きるということでしょう。さらに、環境教育も、基本的にこ



絵4. 星野富弘氏の『はなきりん』
（「風の旅」立風書房より）

のような原点から出発する必要があるのではないかと思います。

『日々草』です。「今日も一つ悲しいことがあった。今日もまた一つうれしいことがあった。笑ったり、泣いたり、望んだり、あきらめたり、憎んだり、愛したり、そしてこれらの一つ一つを柔らかく包んでくれた数え切れないほど沢山の平凡なことがあった。」[絵6. 参照]



絵5.『たんばば』(同上)



絵6. 同氏の『日々草』(「鈴の鳴る道」借成社より)

実は子どもたちの詩も用意していますが、それは時間の関係上、省略させていただきます。「言葉」の話につけ加えますと、星野さんの詩にあらわれたような言葉、すなわち体験に裏づけられた言葉というのは非常な重みを持っております。禅の大家である鈴木大拙がこういうことを言っております。「どのような生き方をしても、人間というものは、人生の芸術家である。」すべての人間は人生の芸術家である、そう言っております。

私自身、言葉を使っていろいろな人と接触したりしておりますけれども、日ごろから感じていることがあります。「言葉は魂のメスである。医者、メスを手に、高き精神は、言葉をメスにして心を癒す。」そう思います。「傷を負った者こそ癒す力がある。」先ほど人生というものが、これだと固定したものではなくて、プロセスだと申し上げました。その長い人生を歩んでいる間に必ず挫折とか傷を受けていくわけですけれども、むしろそれだからこそ人に優しくできるのではないか。あれだけ星野さんが傷を受けていても、あれだけすばらしい優しい詩と絵がかけるということは、やはり深く深く傷つきながらも、深く深く相手を包み込むことができたからではないかと思えます。

そこで、結論にいたします。私たちの生活するこの亀岡を郷土とし

て愛し続け、心のふるさととして、多様な見方からもう一度再認識するというのが、私たちが「心豊かに感じ、考え、行動すること」の基盤となるだろう。そのように私は考えて、厚かましくも今日ここで皆様にお話させていただいたわけでございます。

長らくご清聴ありがとうございました。(拍手)

〈付 記〉

この講演では、科学と哲学を事実と価値にそれぞれ関係して論じていますが、それは論旨を明快にするためです。注意深く読んでいただくと、「伝統的」科学と「伝統的」哲学という狭義の科学と哲学であることがおわかりになると思います。現代哲学では両者の明確な区分から出発せず、相互浸透している現象を認識する哲学から出発する必要があります。その点については、言葉足らずながら「多様性」「言語の問題」「宗教的なもの」「等身大」という表現に含意されていることが了解されるでしょう。

なお、講演にあたって、亀岡市教育委員会の皆様に深い感謝の意を表したく思います。

市民大学の受講を終えて

〔第一講〕 「人権のゆくえ」

岡部伊都子（エッセイスト）

機械文明・自然破壊・人為の危機が、人権のとらまえ方、自由のとらまえ方を混乱させている様相にとぎすまされた感性で焦点を当てていただきました。

いのちある限りの学習は、他者を理解し愛するため、共に喜び会うために行うものであり、決して他者を破壊し差別し、威張るために使うものでないことを学びました。

〔第二講〕 「卑弥呼とその時代」

上田正昭（京都大学教授・市民大学学長）

全体がわかって専門部分が成立つ歴史研究のすじみちを、邪馬台国・卑弥呼の時代並びに丹波の古代の見方から学びました。

口丹波は卑弥呼とその時代に夜明けを迎え、以後この地域が、有力政治集団のもとにあったことの説明を受けました。又、瀬戸内・日本海文化圏の接点として、古代丹波を見つめていかなければならないことの教えを受けました。

〔第三講〕 「今よみがえる明智光秀とその妻熙子」

中島道子（作家）

感性豊かな芭蕉をして感動せしめた光秀の妻熙子の生き方、今尚、世をはばかりながら引きつがれている光秀像から、歴史の消された部分再現への視点が示されました。

信長と光秀の対比、時代と人物に対する既成感覚再評価の必要性を学びました。

芭蕉の句

月さびよ

明智が妻の

はなしせむ

〔第四講〕 「心豊かに感じ、考え、行動すること」

谷口文章（甲南大学助教授）

物質的な豊かさを求める中で、人間疎外や自然破壊は進行しています。その深刻事象と把握のしかたに耳を傾けました。

心豊かな人生を営むために、心の内の環境・外の環境を確かに見つめ、心のふるさとである地域から、新たな感性・思考を育て、行動していくことの大切さを学びました。

〔第五講〕 「ベートーヴェンの世界」

ジェラルド・ジャーヴィス（ヴァイオリニスト）

樋上由紀（ピアニスト）

世界的ヴァイオリニスト、ジェラルド・ジャーヴィス氏による世界の名器「ガダニーニ」演奏と、ピアニスト樋上由紀氏のピアノ演奏に聴き入りました。

曲の時代背景や作曲家についての解説を交え、鑑賞した曲は次のとおりでした。

ベートーヴェン・ヴァイオリンソナタ「春」、ドビュッシーのヴァイオリンソナタ「ト短調」、など全8曲、最後に「さくらさくら」の合唱で感動の中に終わりました。

〔第六講〕 「南極に生きる」

蜂須賀弘久（京都教育大学学長）

今までとこれからの南極観測の意義、そして、極地における人間の生活生態から、人の生きる営みの表れ方を聴きました。

文明社会は生活様態の多様化をもたらし、多くの問題を生み出していますが、人間が心身共に好調な社会生活を営むのに必要な条件づくりについて、ユーモアを交えての講義の中でくらしの基礎基本のあり様を考えさせられました。

第六講の終了後、全講義の受講者に修了証を授与しました。学生は、亀岡市民をはじめ亀岡周辺の方々288人で、全講義受講者数は96人でした。

第二期の生涯学習市民大学は、第一期と比べて出席率も高まり、目的意識を持って参加された方が多く見られました。年齢層も幅広く18組のおしどり学生が熱心に受講されている姿は、ほほえましく市民ホールが暖かみのある学び舎となりました。

受講者の声

毎日仕事、家庭、子育てと忙しい時間の中で、目的を持って参加できたことは、有意義な時間がすごせたと大変満足しています。

終わった時の心の充実感は、日常生活の活力となり、新しい思いで生活できました。

また、機会があればずっと受講させて頂きたいと思います。

(女性 46歳)

自分自身、この10数年間触れたことのなかった世界に自ら入ってまいりました。

一講一講大変楽しみにして会場に来ることができ、また、6回とも受講できたことに対し、自分なりの満足感を持つことができました。

豊かな心は、豊かな文化によって育てられることを改めて感じました。

(男性 37歳)

(『生きる喜びつくるまち-生涯学習 かめおか-』第5号より転載)

VII

研究室活動内容

1 . 講義概要

演習Ⅰ・Ⅱ：4：通年：

心身問題と文化論

本年度は心身問題と文化論をテーマに、心のあり方や文化が、どのように身体、行動、社会に影響するかを学ぶ。そのために、前期で市川浩著『<身>の構造』によって、現代哲学を理論面から研究して、心身一元論を確認し、後期では木村敏著『人と人との間』を、実践的応用面における精神医学的視点から輪読する。その際、日本人特有の罪と義理・人情、風土、甘え、気などについての日本文化論を資料として、西田哲学、和辻倫理学、ハイデッガーの存在論をベースに研究することになる。

ゼミでは、文献の精読、研究の発表方法を学ぶと同時に、レポート、卒論の指導も行なう。

教科書：市川 浩著『<身>の構造～身体論を超えて～』（青土社）

木村 敏著『人と人との間～精神病理学的日本論～』

（弘文堂）

哲学の諸問題：4：通年：

ニーチェ『悲劇の誕生』、『ツァラトゥストラ』における自己実現の問題

「わたしはあなたがたに超人を教える。人間とは乗り越えられるべきなものかである。あなたがたは、人間を乗り越えるために何をしたか。」（ニーチェ）

ニーチェの古典を通じて、永劫回帰、超人、アポロ・ディオニュソスの精神、神話、芸術、音楽論等についてのニーチェの考え方になじみながら、人生の問題について諸君と共に考えていきたい。

その後、そのニーチェの世界を、フロイトおよびユングの深層心理学の理論を適用して、哲学、心理学、神話学における「自己実現の問題」をテーマに分析していく予定である。

教科書：ニーチェ『ニーチェ』（中央公論）

プラトン『ソクラテースの弁明、クリトーン、パイドーン』（新潮文庫）

参考書：ブルフィンチ『ギリシャ・ローマ神話』（角川文庫）

西洋哲学史Ⅱ：4：通年：

精神史の研究

精神史を導きの糸にしなが、近代から現代にいたる西洋哲学思想を概観する。

その後、フランス系、イギリス系、ドイツ系の思想の代表的源流となったデカルト、ヒューム、カントの学説を詳細に検討する。時間が許せば、現代哲学のハイデッガーにも触れる予定である。

講義はノートが中心であるが、精神史の研究であるため、できるだけ具体的な事柄、現代社会の諸問題も考察するつもりである。

基礎演習（Bコース）：4：通年：

松	尾	恒	子
深	谷	昭	三
角			洵
上	村	邦	子
斧	谷	彌	守
谷	口	文	一
港	道		章
森		茂	隆
			起

「人間の心とイメージ」

人間、心、イメージ表現などについて基本的な勉強をしながら、各自の興味、関心を見つけ出してほしい。

Bコース全体へのオリエンテーションとして考えている。

「おとぎ話の心理Ⅰ」（松尾）

「おとぎ話の心理Ⅱ」（森）

「人間とモラル」（深谷）

「人間の思考と神話の考え方」（谷口）

「人間の科学と身体」（港道）

「神話とイメージ」（上村）

「言語とイメージ」（斧谷）

「自然とイメージ」（角；テキスト：シュティフター『水晶』

岩波文庫）

イメージ・トレーニング：2：前期：

松	尾	恒	子
西	田	英	樹
斧	谷	彌	守
谷	口	文	一
森		茂	章
桜	井		起
上	水	流	伸
			子

心の中で常に働いているイメージについて考え、実習を通してさまざまなイメージを実際に実感してみたい。Bコース全体の基礎的なトレーニングとして予定している。

1. オリエンテーション（全員）

2. 色彩のイメージⅠ（西田）
3. 色彩のイメージⅡ（西田）
4. 絵による会話（斧谷）
5. 美的イメージ（斧谷）
6. イメージの旅（森）
7. 描画法とイメージ（森／松尾）
8. スポーツにおける精神集中／メンタル・コントロール（桜井）
9. スポーツにおけるイメージ・トレーニング（上水流）
10. 催眠法の理論と実際〔VTR〕（谷口）
11. 自律訓練法におけるイメージと実習（谷口）— 5(50)円玉と30cmの糸を各自用意
12. まとめ（全員）

クレヨン、クレパス、色鉛筆の
いずれかを各自用意する

哲学（B）：4：通年：

「人間は精神である。しかし精神とは何であるか？精神とは自己である。しかし自己とは何であるか？自己とはひとつの関係、それ自身に関係する関係である。」（キルケゴール）

生きる意味そして個人がおいてある社会を考える場合、人は「自己とは何か」という問いを発せざるを得ないであろう。自己認識こそ哲学の第一歩である。人生を、社会を洞察する方法として、哲学の求めるものを諸君と共に「哲学したい」と考えている。

具体的には、哲学への導入、存在論、認識論、価値論を大きな枠組みとしながら、情念、言葉、論理、実存、文化をテーマにして研究する。また、これらの理論が、現実にどのように有効であるかを確かめる意味で、書物・文献の紹介、スライド、VTRなどを通して、リアルな現実を把握できるように試みたい。

講義から諸君の求めるものに対して解決できる糸口が見出されることを希望している。講義はノートによる。

2. 活動記録

□1990年度業績一覧表

- 谷口文章 「円形脱毛症の箱庭療法過程
－時間的制約下での催眠療法の併用－」
日本箱庭療法学会編『箱庭療法学研究, 3巻2号』
(1990年10月)
- 谷口文章 「心豊かに感じ、考え、行動すること」
亀岡生涯学習市民大学・講演
亀岡市・亀岡市教育委員会(於:亀岡市民ホール)
(1990年12月15日)
- 谷口文章 「神経症嘔吐をともなう不登校男子の箱庭療法」
宝塚箱庭療法研究会・口頭発表
(1991年1月19日)
- 谷口文章・小谷英子「神経症嘔吐をともなう不登校男子の箱庭療法」
甲南大学紀要 文学編79 社会科学特集
(1991年3月15日)
- 谷口文章 「現代における『宗教的なるもの』」
里見軍之編著『現代思想のトポロジー』(法律文化社)
(1991年3月20日)

□ゼミナール合宿

◎第二十回ゼミ合宿(1990年3月18日～20日 於: IUSK)

研究発表会

哲学系…丸山圭三郎『フェティシズムと快楽』

(紀伊國屋書店)

医学系…中川米造『環境医学への道』(日本評論社)

教養系…中橋 実『がんばれコート』(長征社)

谷口文章助教授による講演「精神病理の理論と神経症の事例報告
～哲学の視座から～」

プレイ療法実習: フィンガーペインティング、KJ法、
自立訓練法、箱庭療法

※ IUSK = 関西地区大学セミナーハウス

◎第二十一回ゼミ合宿(1990年8月6日～9日)

於: 千福寺、淡路島モンキーセンター)

研修旅行として淡路島モンキーセンターを再訪、中橋実所長に
お話しを伺い、日本猿を調査・観察し、記録を取る。真言宗・千
福寺にて山階宏泰御住職に講演していただき、またヨーガも体験
する。

- 第四回谷口会（1990年4月29日 於：宇治 鮎宗）
卒業生、現役生、22人が集い親睦を深めました。

□ ゼミ構成員

阿部哲也（文4）・上田雅美（文4）・平岡未央（文4）
松本昌樹（文4）・光石好雄（文4）・村嶋 務（文4）
辻 孝司（理4）・村松圭吾（理4）・小花直樹（経4）
吉川亜子（経4）・小西克弥（経4）・井垣博美（文3）
北村光子（文3）・有井直美（経3）・山本 香（経3）
前田拓志（理2）・木戸英貴（理1）・島津一樹（理1）
奥山昌治（経1）・北村泰広（経1）
小谷英子（文研究生）・辻 啓之（文修1）
天野雅夫（文研究生）・田中素子（文研究生）
渡辺昧比（文聴講生）

編集後記

大幅に遅れておりました1990年度報告書が、ようやく発行に至りました。完成を楽しみに待っておられた方々には、特にお詫び申し上げます。一年間の発行遅れにより、本書の作成には新一年生の活躍があったことを報告させていただきます。この成果は、次号、そして10号にて発揮されると期待しております。

この夏訪れた淡路島モンキーセンターの方々には、撮影等に多大な御協力を頂き、誠に有難うございました。一部ではありますが、その時の記録を掲載させていただきました。また、この記録は12月の亀岡市民大学でも生かされておりますが、この授業風景も、本書にて少しでも味わって頂ければうれしく思います。

今年も多方面の先生がた、並びに本書作成に御協力下さった方々には大変お世話になりました。有難うございました。また、卒業間近まで中心となり助けて頂いた諸先輩方、そして後輩のゼミ生たちの力があってこそ、この報告書が完成したことを加筆したいと思います。

最後に、多方面に互り、暖かく御指導下さった谷口先生に深く感謝致します。

編集者代表：木戸 英貴 天野 雅夫
奥山 昌治 都島 和美
井垣 博美 北村 光子
永野 智仁 北村 直基



< 1990年度活動報告書 >

編 集 者	天野・都島・延原・井垣・北村(光)・山本・有井 清水・前田・奥山・木戸・嘉本・島津・永野 北村(直)
発 行 所	甲南大学 文学部 谷口研究室 ☎(078)431-4341 (内線553)
発 行 日	1991年10月19日
印 刷 所	甲南学園 総務部 総務課 複写センター
協 力	ユニバーサル株式会社

